

42512

教科書文庫

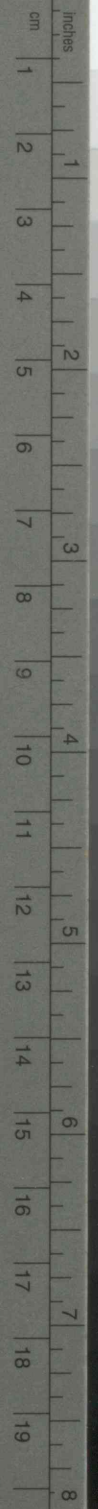
| |
|----------------|
| 4 |
| 810 |
| 44-1938 |
| 20000 64984 |

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

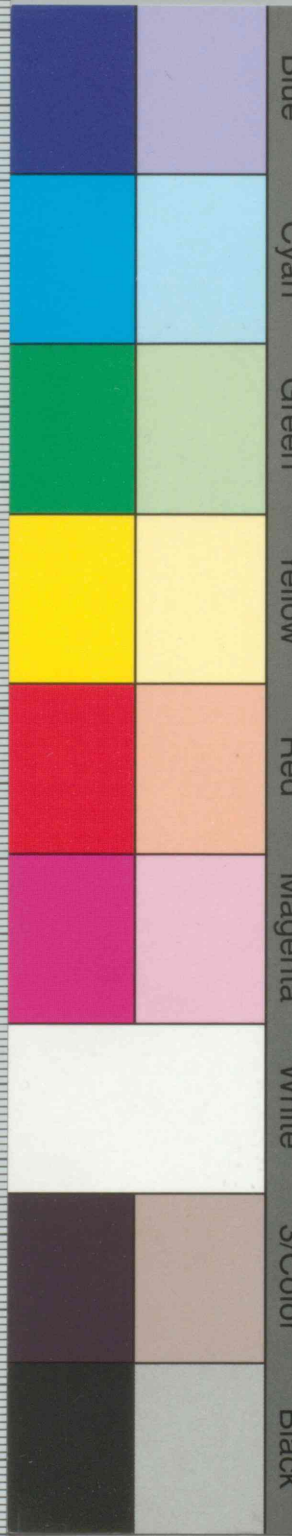


© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9
Ue 4
資料室



國語讀本
新改
版訂
卷三



資料室

濟定檢省部文

用科文漢語國檢學中 ● 日六廿月二年三十和昭
用科語國校學業實 ● 日六廿月二年三十和昭

國語彙本 卷三

改訂新版

文學博士

上田萬年
榮田猛猪
鹽野新次郎

編共



375.9
Ve 4

國語彙本 卷三

國語讀本 卷三

目次

| | |
|--------------|---------|
| 一 自國を知れ | 徳富蘇峰 一 |
| 二 勿來關 | 熊田葦城 六 |
| 三 蟲出づる頃 | 横山桐郎 九 |
| 四 太田道灌 | 湯淺常山 一六 |
| 五 史傳を讀むべし | 大町桂月 一八 |
| 六 雜草の花 | 服部純雄 二二 |
| 七 若葉の雨 | 薄田泣菫 二九 |
| 八 わが投げし鞠(和歌) | 石川啄木 三五 |

九面

村松梢風 三八

一〇 峠の茶屋

夏目漱石 四五

一一 二宮翁夜語

福住正兄 五二

一二 叡山の鳥

高濱虚子 五八

一三 オリムピツクの今昔

行田重治 六二

一四 若人六千の太行進

六九

一五 日本アルプスの空

鈴木文史朗 七七

一六 雲海(詩)

川路柳虹 九〇

一七 九十九里

徳富蘆花 九二

文章の山

八波則吉 九九

一八 初學者のために

島崎藤村 一〇一

一九 鬼作左の嬉し泣き

新井白石 一〇八

二〇 地獄極樂壁一重

西村真琴 一一四

二一 故郷

正岡子規 一一九

二二 歸省(詩)

尾崎喜八 一二四

二三 ナポレオンの一面

鶴見祐輔 一二八

二四 詩的農園

菊池幽芳 一四〇

二五 町人諭吉

太田正孝 一四六

二六 獨立

福澤諭吉 一五六

二七 伊勢參宮

五十嵐 力 一五九

| | |
|-----------|-----------|
| 二八 武藏野 | 國木田獨歩 一六五 |
| 二九 玉の御聲 | 井上通泰 一七三 |
| 三〇 我等の陸海軍 | 平田晋策 一八四 |
| 三一 善言三題 | 三浦梅園 一九四 |
| 一 毀譽は大節 | 一九四 |
| 二 斷えざる努力 | 一九七 |
| 三 理窟と道理 | 一九九 |
| 目次終 | |

國語讀本卷三

一 自國を知れ

徳富蘇峰

徳富蘇峰
名は猪一郎、熊本
縣の人、貴族院議
員、大阪毎日新聞
社々賓。

「己を知れ」とは總べての人間の學問の第一義である。けれども、己といふのは、我が一身一個の事のみとは限らぬ。われは一個人として生活するものではない。家もある、國もある、世界もある。己を知るためには、我が家をも知らねばならぬ、我が國をも知らねばならぬ、また我が世界をも知らねばならぬ。

我が身を知る必然の順序として、誰しも我が家に就いて知らぬ者はない。若し我が家の何ものであるかを知らない者があれば、それは全く浮浪者である。若し我が國の何ものであるかを知らない者があれば、それは全く非國民である。若し世界の何ものであるかを知らない者があれば、それは全く世界の市民たる資格がない。

今日に於て、世界は交通及び通信機關の發達と共に、愈、近く、愈、密に、愈、狭く、愈、小になりつゝある。けれども、世界を統一して一國を成すが如きは、今なほ遠き理想の境にあつて、未だ實行的可能性は見出されてゐない。言はば、世界統一は人類あつて以來の理想であるが、その遼遠なることは、殆

ど今なほ昔の如くである。恰も金星や火星と地球との距離が、今も昔も同一であるが如くに。

今日に於て人類團結の實行的極致は國である。國は大にしては世界に接してゐる、國は小にしては家に接してゐる。されば人間生活の上に於て、國は實に重要な機關である。吾人は一家の安寧を保つにも、國の力に頼らねばならぬ。一家既に然りとすれば、一身は言ふまでもないことだ。吾人が世界に貢獻するにも、國の力を通して爲さねばならぬ。

人或は國を以て無用の長物となし、甚しきは世界の平和を妨害する邪魔物であるかの如く言ふものがある。大い

なる間違だ。若し國がなくて、家と世界とのみあるとすれば、一家の安寧は如何にして保ち得べきか。世界の平和は如何にしてつなぎ得べきか。國あるがために世界の平和を攪亂するといふか。若し國がなかつたならば、世界は全く弱肉強食の修羅場となるかも知れない。兎にも角にも、現在の情態までに漕ぎつけ、世界が小康を保つに至つたのは、列國が存立するからである。言ひ換へれば、國あるがために世界の争亂が減少するのである。國あるがために世界の争亂が減少するのである。

今日に於て國をぬきにして、家から直ちに世界につながくことは、實際上不可能である。強ひて之を行はうとすれば、

應仁の亂
應仁元年(三三三)細川勝元と山名宗全とが京都に構へた戰亂。文明九年(三三三)に至つて終つた。

春秋戰國
春秋は周の平王より敬王に至るまで約二百四十年間、戰國は周の威烈王より秦始皇帝に至るまで約八十年間、群雄割據して天下の亂れた時代。

事實は世界に無數の小國を製造する結果となる。すなはち世界を擧げて、我が應仁の亂や、支那の春秋戰國や、歐洲の中古の如き情態を現出することは鏡にかけて見るが如くである。

故に今日の人類進歩の程度に於ては、國は人類集團の極致と云はねばならぬ。この國を愛する心を愛國心といひ、この國に盡す心を報國心といふ。しかも、國を愛するにも國に盡すにも、その前提として、先づ我が國は何ものであるかを知らねばならぬ、能く知らねばならぬ。之を知るは之を愛し、之に報ゆるの前提である。(國民小訓)

熊田葦城
 名は宗次郎、廣島
 縣の人、歴史家。
 源義家
 八幡太郎。頼義の
 子、義光の兄、天
 仁元年(七六八)歿、
 年六十八。

勿來の關
 福島縣(磐城)と茨
 城縣(常陸)との境
 上。今鐵道常磐線
 勿來驛の南二軒に
 關址がある。

二 勿來關

熊田葦城

源義家、出羽を治むること十年、國內靜平にして民心悅服

す。乃ち留守を置きて京師に還らんとす。

春風長閑に渡りて、一路の芳草、

馬蹄輕し。客心悠悠、また戰時の

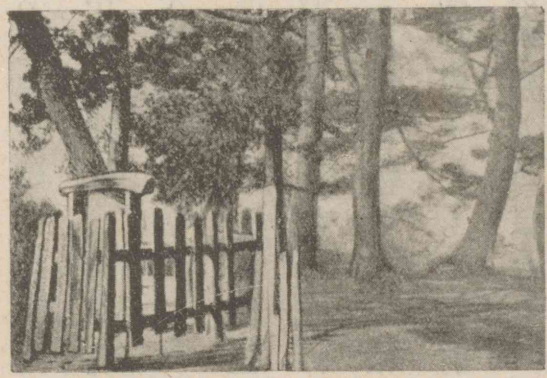
秋に似ず。行きく、て勿來の關

にさしかゝる。山上、模糊として

白きは雲か。地上、繽紛として、

翻るは雪か。雲と見えしは梢の花、

雪と思へるは散り來る櫻。關山春深きところ、心なき身も、



勿來關址



—— 勿來關 (嵯峨一筆) ——

感などか起らざらん。兵馬倥傯の間において、月を見れども、樂しからず、鳥を聞けども、嬉しからず。今や干戈既に戢まりて、襟懷特に安し。將軍駒を樹下に駐めて、願望すれば、胄も花、鎧も花、身はいつしか畫中の人となる。逸興頓に湧きて、詩情自ら動く。

吹く風をなこそ、その關と思へども

道もせに散る山ざくらかな

一かへり二かへり口吟みつゝ、永き日の暮れなんとするをも知らず。

かくて長亭短驛、日數を重ねて京に着す。百戰功を重ねて、一門光を添ふ。來りて賀を述ぶるもの、門前市を成す。

一貴人
關白藤原頼通。

武人は武を談じ、歌人は歌を談ず。一貴人義家に向ひて語る、陸奥は名所多き國と聞く。年久しくかの地に在りつれば、皆それくに見候ひなん。これのみこそ羨しき心地すれ。と。義家畏まりつゝ答ふ、心長閑けく候はんには、ゆかしき事も候ふべけれど、軍に暇なき身には、優しき詠とても候はず。唯勿來の關と申す所にて、花の散るさまの餘りに興深く、あはれ心あらん人に見せまほしく覺え候ひしかば、其の儘にうち過ぎなんも口惜しく、をこの口吟に任せて斯くなん。とて、かの「吹く風」の歌を打誦すれば、げにも秀歌をこそ致しつれ。とて、感嘆特に淺からず。花は櫻木、人は武士。斯の人斯の花を詠じて、花と人と千古に香し。(日本史蹟)

横山桐郎
東京の人。農學博士。昆蟲學者。農林省蠶業試驗場技師。昭和七年歿、年三十九。

三 蟲出づる頃

横山桐郎

寒い風がぬくまり、日光がだんく、暖かさを増すと、自然は春の野外劇の準備に忙しくなる。

春空に囀る雲雀の歌と、日向の草土手に氣兼ねらしく咲く「さぎごけ」などの花に、縋りついてゐる小虻の合唱に、野外劇の幕は開かれる。それは年々同じ藝題を繰返すのだが、昔から今日まで忠臣藏が少しも廢らないやうに、幾度繰返されても、少しも興味が減る事なく、いつも湧くやうな人氣である。無論、その規模、演出の技巧、將又綿密さに於て、自然の野外劇は人間のそれとは比較にならぬ程優れてゐる。何時何處から生まれ出たかと思はれる白地に黒い紋付

忠臣藏
假名手本忠臣藏。
淨瑠璃の名作。竹田出雲等の作。

白蝶



の翅を持つた中形の蝶々が、さも楽しげにひらりと、或は大根の花を求め、或は蜜を求め、或は鬼ごっこをして花の間を飛び廻つてゐる。野外劇の序幕は、この白蝶の舞踊には

じまると言つてよからう。

しかし、白蝶は蝶仲間でも最も平凡なものとして軽視され、

その幼蟲の青蟲は、吾々の栽培する十字花科植物の油菜大根



横山 郎

等の葉を食ふ害虫であるが、春のおとつれを告げる第一の使者として、私はこの蝶に敬意を拂ふものである。

冬の間は全く休業してゐた畔の小溝が、春の讚歌を合唱

し始めると、それに伴はれて蟲界の名ダンサー「水すまし」は、眞先に得意のダンスを舞ひ始める。すい〜と進み行く流の上、葦や杭の立並んだ間に、妙技を振つて、散歩の人の眼をひき止める。小豆大の黒光りのする身體の背には、陽が白く銀の豆のやうに光つて見える。

彼等は流に逆らひながら、さも身輕に水の面をくるくると渦を巻いて走る。そして人の足音や、一寸物音がすると、眼にも留らぬ速さで廻り始め、更にひどく驚くと、ダンスをやめてあわてて水の中に潜つて行く。そして水底の木片や小石の下に潜り込んで、暫くじつと様子をうかがひ、もう大丈夫と思ふと、又ついと水面に出てダンスを續ける。そ



あめんぼう

チャンピオン
選手。

げんごろう



たがめ



水かまきり



の敏速な妙技は蟲界第一である。水面を走ることで、あめんぼうも一廉のチャンピオンには相違ないが、その技は「水すまし」に比べてはお話にならない。

尙、水の中には、へうきんな體つきをした「げんごろう」、山賊のやうな面構に、天鎌みたいな二本の前脚を擴げて泳ぐ「たがめ」、まるで棒切れの様な野暮な色と「恰好」をした「みつかまきり」等、何れも「劣らぬ水中の追剝、辻強盜連が、互に牙を鳴らして睨み合つてゐる。

長い冬眠から覺めた蜜蜂は、朝早くから花を訪ね、蜜と花粉とを集めて子孫を養ふべく奮闘を始め、熊蜂の雌は隠れ家を出て、新しい家庭の建設に取りかゝる。花蜂はくさむ

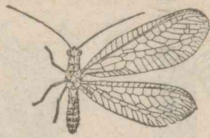


ごまだらひとり

らに野鼠の巢を探して、おのが巢を營むべく活動を始め、大工蜂は枯杭に穴をほつて子供の養育室を建て、壁屋蜂は泥を含んで、これ又育兒室を造る。庭石の傍では、小蟻がせつせと細かい土塊をくはへ出して巢を造り始める。皆子孫のためにいそ／＼として働いてゐる。

梅の若芽が伸び、桃の花が散り、青い芽が顔を出して暫くすると、鮮かな緑がいつしか灰色の網で包まれてしまふ事がある。見ると、三分程の水色のいやらしい毛蟲が、うじやうじやと群つてゐる。又裏庭に生えた蔞の葉が食荒されて、だいなしになつてゐる事もある。これは大抵、灰色の長い毛をもつ「ごまだらひとり」といふ蛾の幼蟲の仕業である。

くさかげろふ



草花の莖には「あぶらむし」が、うよくくとたかつて盛に子を産む。その間を黒蟻が徘徊して、「あぶらむし」から蜜を貫ひ、代償として無力の「あぶらむし」を保護する。さうして蟻の警戒の裏をくゞつて、「くさかげろふ」や「ひらたあぶ」の幼蟲は、この「あぶらむし」を食つて歩く。

春の樂園も、裏をのぞいて見ると恐ろしい生存競争の大悲劇の舞臺である。生きる者、死ぬ者、食ふ者、食はれる者、それらの者が各、生命を完うし、子孫の繁殖を計るべく奮闘努力する様は、蟲ながら實に敬服に値する。路傍に、庭園に、蠢々として動く、無心に見える小蟻の一舉一動にも、深い思慮と大きな意味とが含まれてをり、花に寄

り添ふ胡蝶の舞も、單純な悅樂ではない。生物界の生存競争の大活劇は、先づ陽春三四月に幕を切つて落し、細かい蟲と蟲、蟲と植物の争闘に始まり、やがて幾千幾萬の蟲が續々と舞臺に現れ、各得意の演技をする。その千態萬様、十人十色の妙技の表現は、正に他の生物界に見られない興味がある。蟲の研究、それは詰らぬ仕事のやうだが、その底に潜む興味の眞髓、彼等によつて示される尊い教訓、深刻な諷刺は、假名手本忠臣藏以上に吾々を訓へてくれる。

私は多くの人々が、蟲に對して、もう少し同情と理解とを持ち、蟲を研究する人達に、今少し尊敬を與へてほしいと思ふ。日本の昆蟲學はあまりに貧弱であり、昆蟲學者はあま

りに輕視されてゐる。(蟲の世界を探ねて)

四 太田道灌

湯淺常山

湯淺常山 名は元禎。岡山藩士。江戸時代後期の儒者。天明元年(三十四)歿。年七十有四。

太田左衛門大夫持資は上杉定正の老臣なり。鷹狩に出

太田道灌 名は持資。資清の子。剃髮して道灌と號す。文明十八年(三三)上杉定正に殺された。年五十七。

でて雨に逢ひ、ある山家に入りて、蓑を借らんといふに、わか

上杉定正 扇谷(アブキガヤツ)上杉氏第六代の主。山内上杉七代の主顯定と連年戦を交へた。七重八重後拾遺和歌集に出てゐる。中務卿兼明親王の歌。

き女の、何とも物をばいはずして、山吹の花一枝折りて出し
ければ、花を求むるにあらず。とて怒りて歸りしに、これを聞
きし人の、それは、
七重八重花は咲けども山吹の
みの一つたになきぞ悲しき
といふ古歌の心なるべし。といふ。持資驚きて、それより歌

廳南

千葉縣(上總)長生郡にある。康正二年武田信長(三河入道)に築いた。上杉氏に抗した。



太田道灌(木島櫻谷筆)

遠くなり 僧曉月(冷泉爲守)の歌。

「遠くなり近くなるみの濱千鳥
ちどりといふ鳥はなみそて遠ぶとりにあてかる。」

四 太田道灌

一七

に志をよせけり。

定正、上總の廳南に軍を出す

時、山涯の海邊を通るに、山上よ

り弩を射かけられんや、又潮満

ちたらんや、はかり難しとて危

みけり。折節、夜半の事なり。

持資、いざ、われ見來らん。とて、馬

を馳せ出し、やがて歸りて、潮は

干たり。といふ。「いかにして知

りたるか。」と問ふに、

「遠くなり近くなるみの濱千鳥

其の音に潮の満干をぞ知る
鳴く音に潮の満干をぞ知る

とよめる歌あり。千鳥の聲遠く聞えつ。といひけり。又、いづれの時にや、軍をかへす時、これも夜の事なりしに、利根川を渡らんとするに、暗さは暗し、淺瀬を知らず。持資また、

そこひなき
素性法師の歌、古今集にある。

「そこひなき淵やはさわぐ山川の
あさき瀬にこそあだ波はたて

といふ歌あり。波音あらきところを渡せ。といひて、事なくわたしけり。持資後に道灌と稱す。(常山紀談)

五 史傳を讀むべし

大町桂月

青年はいかなる書物を讀むべきかとの御問に對し、卑

大町桂月
名は芳衛、高知縣の人。文章家。大正十四年(一九二五)歿、年五十七。

見左に申し述べ候。

人は何人も摸擬性と感染性とを有し居り候。而して一生の中、この二性の最も熾なるは、少年時代若しくは青年時代に候。どちらかと申せば、摸擬性は少年の方が強く、感染性は青年の方が強く候。君子に接すれば君子に感染し、小人に接すれば小人に感染し、豪傑に接すれば豪傑に感染し、小才子に接すれば小才子に感染するものに候へば、讀物の選擇もこれより割り出さざるべからずと存じ候。

この頃の青年の一般の缺點は、歴史傳記の智識に乏しき事に候。隨つて今の青年は、聖人君子、英雄豪傑、志士

積善の家
積善之家、必有餘慶。積不善之家、必有餘殃。(易經、文言)

仁人大學者、大宗教家、忠臣孝子などに接すること極めて少く、自然人物が小さくなり、眼界が狭くなり、神經のみが尖り申し候。これ實に國家百年の大患に候。故に小生は大呼す、請ふ大いに史傳を讀まれよ。と。又一つ今の青年に通じたる缺點これあり候。そは個人的若しくは孤立的といふ點に候。即ち前代と絶縁して、おのれ一代と思ふ考があまりに強く候。随つて重厚雄大の氣風無くして、こせくちよこくする小人物が多く候。これも史傳と親しまぬよりおこること候。史傳を讀めば、積善の家には餘慶あり、積不善の家には餘殃ありといふことがよく解り申すべく、行が

自ら重厚になり申すべく、人物もどつしりとして參り申すべく候。申すまでもこれ無く候へども、國家の盛衰興亡は、全く人物の有無如何にこれあり候。盛なる國も人物なければ忽ち衰へ、振はざる國も人物あれば忽ち振ふ。我が國將來の發展に就いても、國民の人格を重厚雄大ならしむるが最大急務なりと確信致し候。人格を重厚雄大ならしむるには、史傳に親しみて、偉人に感染するに若くはなしと存じ候。聖賢の遺著は史傳を歸納したるものに候へば、史傳と共に常に座右に置き、日々絶えず讀誦なさるべく候。さらば卑怯鄙吝の念次第に

消えて、心が公明正大になり申すべく候。文學も古きものは精神の香たかく、人の心を淨化致し候へども、近時の文學は動もすれば人を誤るもの多ければ、その選擇には深き注意を要すべく候。(桂月書簡集)

六 雜草の花

服部純雄

服部純雄
元岡山縣金川中學
校長。

雲雀の歌聲に夜があけて、雲雀の歌聲に陽が暮れるころになると、散歩は私の生命となつてくる。私の家の門前は一面の麥畑、うしろは直ぐ竹林につゞく雜木の小高い山である。その左側の山裾に、上中下段と三つの貯水池がある。私の散歩は、いつもきまつて此のあた

りで終りを告げるのである。そして池のほとりの、芳しい雜草の上に、ごろりとばかり横たはるのである。

澄みきつた、ゆたかな初夏の大空を見つめてゐると、燕が身輕に滑走して、すうと斜に飛ぶ。や、暫くして、悠然と蜻蛉が過ぎてゆく。更に暫くして、虻が、眼の前一尺のところをブーンと羽音をひゝかせる。

からだを少し斜にすると、旭川の銀川に筏が流れて、すべ

るが如く向うの山かけへかくれてゆく。土手下のうれた麥畑からは、數多の雲雀が舞ひあがる。チーチク、ピーチクと、まるで箱根細工に用ひる轆轤の音をきしらせて、小さな黒點となるまでに舞ひあがる。

旭川
岡山縣にある。高田川の下流で、岡山市を経て兒島灣に入る。

箱根細工
箱根より産出する寄木細工。

一茶
 姓は小林、通稱は彌太郎。また俳諧寺とも號した。信濃國(長野縣)の人。江戸時代後期の俳人。文政十年(1828)歿。年六十五。

池の中の水さびた藻草のかけには、大蛙小蛙が咽喉袋を
 ふくらせ、だみ聲を張りあげて野人の唄と合唱する。
 その聲で一つ踊れよ鳴く蛙
 一茶の飄脱を想起する。
 黒ずんだ青葉の森からは、鶯が啼く。頬白が啼く。春蟬
 が啼く。池の汀には芳しい花茨が雪と亂れる。山の崖、林
 の奥、段々畑の畔近くまで、霧島躑躅が色とりどりに野をか
 ざる。
 何といふ大自然の生命。その生命に輝く美しさであら
 う。
 然し、私に最も興味を起させ、最も親しみを感じしめるも

萬葉
 萬葉集。我が國上代の短歌・長歌約四千五百首を収めた歌集。

ユダヤ
 アラビヤ半島西北の咽喉部。カナンの地。イスラエルともいひ基督教徒が聖地とする處。

ソロモン
 イスラエル國王。富裕と奢侈と知識とで有名であつた。西紀前九五三年歿。

のは、名も知れぬ可憐な雑草の花だ。
 そら、私のねころぶ下にも咲く。
 梅とか櫻とか、木蓮とか、芍薬とか、山茶花とか、百日紅とか、
 これらの花は、上は萬葉の歌人より、下は近代の新人まで、幾
 千萬の人々から頌讚の限を盡されて來たことであらう。
 然るに、この雑草の花のみは……
 想へば、二千年の昔、ユダヤの春野に、キリストが、
 野の百合花は、如何にして育つかを思へ。勞めず、紡が
 ざるなり。
 われ爾曹に告げん、
 ソロモンの榮華の極みの時だにも、

ホキットマン
米國の詩人。(西曆
一八一六—一八六三)
みやこぐさ



ははこぐさ



うつぼぐさ



たつなみさう



その装ひこの花の一つにも及ざりき。

と、ソロモン大王の榮華に比較せられた野の百合花といふは、日本の野山に開く大輪の白百合ではなくして、むしろ満天星に類似した、米粒ほどの白花を開く雑草の一種であるといふ。私は自然の心をぐつと擱んだ此の言葉が生々として、私達の心に迫り來るのを感じる。
民衆詩人ホキットマンの詩集「草の葉」の題名も、この平民思想の發露に過ぎない。

植物學の知識に貧しい私にも、それとわかるは、黄色い小花をつけた「みやこぐさ」と「きんぼうげ」、女郎花に類する「はこぐさ」。薄紫の小花群る「うつぼぐさ」、名にふさはしい立浪

草、幼き夢の「つばなの花」。

しかし、つくつく見まはすと、細かいかぼそい小草まで、それぞれに、小さな花をつけてゐる。

「まあ、こんな草までが。」

と、妻がピンのあたま程の小さい、水淺黄の小花を見せてくれた。よくよく見ると造化の奇蹟はこゝにも宿る。何といふ精巧、何といふ端麗なことであるよ。紫・白・黄・淡紅・臙脂名も知れぬさまの雑草が、それらの小花をつけてゐるのだ。

よく見れば薺花咲く垣根かな
春のはじめ、雑草中の雑草、凡中の凡なる薺の花の開くを



たつな

芭蕉
松尾芭蕉。俳人。
元祿七年(三三三)歿、
年五十一。

牡丹は云々
菊花之隱逸者也。
牡丹花富貴者也。
(周茂叔、愛蓮說)

宇垣野
岡山縣(備前)御津
郡金川町の南郊で
旭川に沿うた地。

見て、大宇宙の靈妙に感動した俳聖芭蕉のおどろきこそ、まことに大詩人の素質といふべきであるまいか。牡丹は花の富貴なるものであらう。菊は花の隱逸なるものでもあらう。又近代人をよろこばす、金蓮花、鈴蘭の花、さては吉野の櫻、月ヶ瀬の梅。あれもよからう、これもよからう。

しかし、人目も遠き宇垣野の、名もなき雜草の野花こそ、平民中の平民である。わたしは彼等を熱愛する。わたしは彼等と呼吸を合する。そして、雜草の花を通じて、天然のところに逼るとしよう。雜草の花を通じて、同一の天則に生きるとしよう。馬に食はれるもよし、人に踏まれるもよし、

ソロモン大王の榮華にまさる造化の純美は、この雜草の花にこそ、輝くと譏れ。(雜草の花)

七 若葉の雨

薄田泣菫

薄田泣菫
名は淳介。岡山縣
の人。詩人。隨筆
家。

野も、山も、青葉若葉となりました。この頃は——とりわけて今年にはよく雨が降るやうです。雨といつてもこの頃は、草木の新芽をぬらす春さきの雨や、もつと後れて来る梅雨季の雨に比べて、またかはつた味ひがあります。春さきの雨はつめたい、また梅雨季の雨は憂鬱に過ぎますが、その間にはさまれた晩春の雨は、明るさと快活さとまた暖かさにとに充ち溢れて、銀のやうに輝いてゐます。春さきの雨

蟄蛙



は無言のまゝ濡れかゝりますが、この頃の雨はひそくと
 聲を立て、降つて來ます。その聲は空の靈と草木の精と
 の囁きで、肌ざはりの柔かさ、溜息のかくはしさも思ひやら
 れるやうな静かな親みをもつてゐます。時々風が横さま
 に吹きつけると、草木の葉といふ葉は、雨の雫が首筋を傳つ
 て腋の下や乳のあたりに滑り込んだやうに、冷さとくすく
 つたさとで、たまらなさうに身を揺ぶつて笑ひくづれて
 ゐるらしく見えるのも、この頃の雨でないと味はれない快
 活さです。

この快活さと明るさとに、そのかされて、蟄蛙はのつそ
 りと草葉の蔭から這ひだして來ます。どうかした拍子に

昔馴染の俳人一茶
 一茶が蟄を詠んだ
 句に
 雲を吐く口つき
 したり舞
 罷り出でたるは
 此の菰の暮にて
 候
 などといふのがあ
 る。



茶一の郷故
(筆邦光部岡)

雨垂が顔の上に落ちかゝると蟄蛙はちやうど酔ひどれが
 口の泡を氣にするやうに、不器用な手つきで、そつと鼻さき
 を撫でまはしてゐます。そして時々立ちどまつて、昔馴染
 の俳人一茶が、旅姿のまゝでぐ
 しよ濡れになつてゐはしない
 かと氣づかふやうに、きよろき
 よろと、あたりを見まはしてゐ
 ます。蟄蛙よ、お前が尋ねてゐ
 るらしい一茶は、いゝ俳人だつたが、彼の魂は長年の悲みと
 苦みとのためにねぢけてゐる。明るいこの頃の雨に一緒
 に濡れるには、ふさはしからぬ友だちの一人です。お前に

この形に描いて作られたもの

はもつといふ友だちがそこに出て來ました。

それは蟹です。蟹は土まみれの甲羅のまゝで、庭石のかけから横柄な身ぶりで這ひだして來ました。鋼鐵製の蒸



ルエウハンベヨシ

氣機關の模型か何かのやうな岩乗づくりで、ぶつ／＼泡を吹いてゐるところは、どう見てもドイツ人の考案したらしい生物で、甲羅のどこかに「クルップ會社製造」とも極印が打つてありさうな氣がします。私の家は海近い砂地に建つてゐるせゐるか、蟹が澤山ゐて、梅雨季になると、壁を傳ひ、柱にすがつて疊の上にならば這ひあがつて來るこ

クルップ會社
ドイツのエッセン
にある鐵工場。

世界はちつと
この

とがよくあります。蟹よ、お前と墓蛙とは、それ／＼異つた生活をしてはゐるが、どちらとも自尊心につきもの、孤獨性をもつてゐるところはよく似てゐるやうです。むかし厭

シヨペンハウエル
ドイツの哲學者。
(西曆一八一六—一八六〇)



ンロイバ

世哲學者のシヨペンハウエルは、イタリーの都に旅をして、ところの人たちが自分に對しては一向冷淡なのにひきかへて、同じ時同じ都に來てゐた厭世詩人のバイロンに對しては、まるで王侯をもてなすやうな歡迎ぶりなのを見て、ひどく機嫌を損じて、そこ／＼に旅をひきあげたといひますが、蟹と墓蛙とはどちらも曲者揃ひで不器量な

バイロン
英國の詩人。(西曆
一七六六—一八二四)

ことにかけてもいゝ取合せですから、お互に機嫌を悪くしあはないで済むことです。

木の上ではまた、雨蛙と蝸牛とが雨を楽しんでゐます。雨蛙は聞いた獨唱家ですが、蝸牛はまた風がはりな沈黙家たまつてゐるです。一人は葉から葉へと飛移りますが、一人は枝から枝へと滑り行きます。雨蛙は藝人のやうに、着のみの着のまゝでどこへでも出かけますが、蝸牛は靈場めぐりの巡禮めぐりのやうに、自分の荷物は一切合財ひつくるめて、背にしよつて出かけます。二人はたまに廣い青々した芭蕉の葉の上で出會ふことがあります。互に目禮目ごさうのまゝ、言葉一つ交さないで、さつさと往きすぎてしまひます。彼等はどちらも腹一

杯雨を楽しみ、雨を味ひ、まゝ雨に戯れるに餘念がないので、ぐづぐづしてゐると、雨はいつ霽れあがるかもわからないのを知つてゐますから。

夜がふけて、湯槽ゆそうにのんびり體をのぼしながら、しとくと降りつゞく雨の音を聞く氣持は、私の好きなものゝ一つですが、それには、この頃の雨が最もふさはしいと思ひます。

(大地讃頌)

八 わが投げし鞠

石川啄木

そのむかし小學校の柱屋根に我が投げし鞠いかにかなりけむ

石川啄木
名は一。岩手縣の
人。歌人。詩人。
明治四十五年歿、
年二十七。

ふとおもふ古里にゐて日毎きゝし雀の鳴くを三年きかざり
 ふるさとの山に向ひて言ふことなしふるさとの山はありがたきかな
 旅七日かへり來ればわが窓の赤きインクの染みもなつかし
 日てり雨さら／＼落ちて前栽の萩のすこしく亂れたるかな
 父のごと秋はいかめし母のごと秋はなつかし家持たぬ子に
 愁ある少年の眼にうらやみき小鳥の飛ぶを飛び

てうたふを
 晴れし空仰げばいつも口笛を吹きたくなりて吹きてあそびき
 ほとばしるポンプの水の心地よき暫しは若き心もて見る
 あの旅の汽車の車掌がゆくりなくもわが中學の友なりしかな
 あの頃はよく嘘をいひき平氣にてよく嘘をいひき汗が出づるかな
 こゝろよき疲れなるかな息もつがず仕事をしたる後のこの疲れ

村松梢風

名は義一。静岡縣の人。文學者。お使番 徳川幕府の職名。諸大名の監察を掌つた。

九面

村松梢風

石川駿河守は二千石の旗本で、寛政年間幕府の御使番を勤めてゐた。もう齡は五十餘り、倅の新十郎には同じ旗本松平善七郎の娘を嫁に迎へて、その間に六つになる男の子まであつた。そろ／＼隠居をする年ころだが、謹直な人でお役目を些かもおろそかにせぬので、上役の氣受もよく、相變らずそのお役を勤めてゐた。

或日駿河守は公用で本所の方へ行つたが、御用も滞りなく済んで、歸路についたのは今の時間の午後二時ごろだつた。これから一旦歸城して老中に復命をすれば、それで今日は御用もなくなる筈である。

実行した結果をいふ

本所 今の東京市本所區。

兩國橋 東京市日本橋區と本所區との間に隅田川に架した橋。創架の當時、日本橋區の地は、武藏國、本所區の地は下總國で、兩國に跨るとの意から兩國橋といつた。

兩國橋を渡つて、道すがら駿河守は駕籠の中から兩側の町家を眺めながらやつて來ると、子供の玩具を賣る店があつた。その店にいろ／＼な面が掛つてゐるのが駿河守の眼についた。すると駿河守は我が家の孫のことを思ひ出した。孫にあの面を買つて行つてやつたら喜ぶだらうと考へた。

「これ／＼。」と駿河守は小さい聲で駕籠脇の士を呼んだ。

「何御用で御座りますか。」

「それ、彼處に玩具を賣る店があらう。あれへ參つて、面を一つ求めて來て呉りやれ。」

「はッ、然し、どのやうなのを需めて參りませうか。」

鹽吹きの面
ひよつとこの面。

「どれでもよい、成るべく面白い面を需めて參れ。」
「畏まりました。」

徒の士は、列を離れて玩具店の方へ走つて行つた。他の
供の者は構はず進んで行くと、彼の士は玩具店へ行つて、鹽
吹きの面を一個買ひ求めたが、人に見られると具合が悪い
ので、羽織の裾でそれを包むやうにして追ひついて來て、駕
籠の戸を僅か明けて、そつと差入れた。

「それでよろしう御座りますか。」

「よい。」

駿河守が手に取つて見ると、張子の面ながらなか／＼よ
く出來てゐる。そこでふくさにでも包んでしまへば何事

もなかつたが、然しこのまゝでは持つて歸つても孫がすぐ
にかむれないから、紐を附けてやらうと考へた。それから
駕籠の簾をよく閉めて、刀の小柄と鼻紙を取出し、鼻紙を捻
つてこよりをこしらへ、面の兩方の耳のところへ穴を明け
て、こよりを結び付け、それから面を自分の顔に當てて、紐を
後ろへ廻して長短をはからうとすると、思はずこま結びに
なつてしまつた。

すると折悪しく向ふから大目附近藤石見守が矢張り装
列を立ててやつて來た。幕府の役人が途中で行き逢つた
時には雙方行列を停めて、各の家來が先方の名を呼んで駕
籠の戸をあける。主人同士は駕籠の中から會釋をしあふ

大目附
徳川幕府の職名。
老中の耳目となつ
て大名を糾察し諸
役人の正邪を監察
した。

のが慣例であつた。

「近藤石見守様——」。

「石川駿河守様——」。

徒の者はそんな事は知らずに戸を明けてしまつた。駿河守はあわてて面を取り外さうとしたが、あいにくこま結びになつてゐるので急には解けない。仕方がないから面をかむつたまゝで會釋をしたので、先方の石見守とその家來の者は、これを見てびつくりした。が、あまりの可笑しさに聲を立てて笑ひ出した。

石見守は、行き過ぎてからも腹の皮が捻れるほど笑つた。およそ世の中にこんな可笑しいことは、またとあるまいと

老中
徳川幕府の職名。
將軍に直屬して政
務を總理する。

思つた。ところが一方駿河守の方は、可笑しいどころではなく、恥かしくて满身冷汗をかいてしまつたが、根が謹直な人だからお城へ歸るや否や、黙つて辭表を提出して、屋敷へ戻つて謹慎してゐた。老中は駿河守が何故辭職を願ひ出したのだから理由が分らないので、段々調べて見ると右の一件が分つて、成るほどそれは可笑しい見物だつたらうと、ここでもまた大笑ひをした。

が、それしきのこととて辭職をさせては氣の毒だから、駿河守に對して内々で辭表を撤回するやうにと傳へたが、頑固な駿河守、なか／＼聽かない。それで止むを得ず將軍家のお耳に達すると、將軍家齊も腹を抱へて笑つたが、

家齊
徳川十一代の將軍
天保十二年(五〇〇)
薨、年六十九。

「彦十郎(駿河守のこと)に、その面を持つて出るやうに申せ。」
といふ上意だ。上意では否應（不承）ないから、駿河守は、例の張子の鹽吹きの面を携へて恐る／＼登城すると、すぐ様お目通り仰せ付けられた。

「その面、これへ。」

家齊將軍は面を手にとつて見てゐたが、筆をとつて面の裏へ「壽」としたゝめ、家齊と署名をした。

「彦十郎、この面は余が汝の孫に取らするぞ。」

駿河守は感泣して御前を退つた。駿河守の辭表が撤回されたことはいふまでもないが、石川家ではその鹽吹きの面が家第一の寶物となつて子孫に傳へられた。

夏目漱石

名は金之助。東京の人。文學者。大正五年歿。年五十。

一〇 峠の茶屋

夏目漱石

「おい」と聲を掛けたが、返事がない。

軒下から奥を覗くと、煤けた障子が立てきつてある。向

側は見えない。五六足の草鞋が淋しさうに庇から吊され

て、屈託氣にふらり／＼と揺れる。下に駄菓子（駄菓子箱）の箱が三つ

ばかり並んで、そばに五厘錢と文久錢とが散らばつてゐる。

「おい」と、また聲をかける。土間の隅に片寄せてある白の

上にふくれて居た雞が、驚いて眼をさます。くゝくゝくゝ

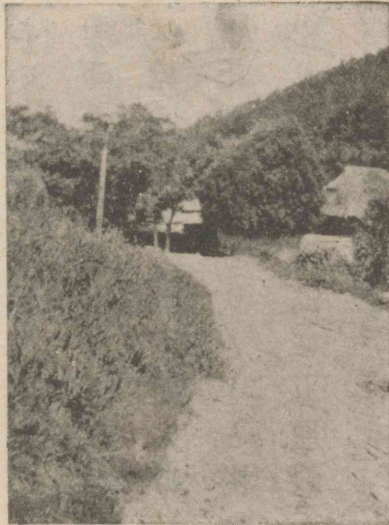
と騒ぎ出す。敷居の外に、土竈（ツツ）が今しがた（ツツ）の雨に濡れて、半

分程色が變つてゐる上に、眞黒な茶釜がかけてあるが、土の茶



文久錢

釜か銀の茶釜かわからない。幸ひ下は焚きつけてある。返事がないから、無斷でずつと這入つて、床几の上へ腰をおろした。雞は羽搏きをして白から飛びおりる。今度は



峠の茶屋の遠望

疊の上にあがつた。障子がしめてなければ、奥まで駢抜ける氣かも知れない。雄が太い聲で「こけつこつ」と云ふと、雌が細い聲で「こけつこつ」と云ふ。まるで自分を狐か狗の様^{イヌノカミ}に考へてゐるらしい。床几の上には一升、柵程な煙草盆が、閑靜に控へて、中には、

とくろを捲いた線香が日の移るのを知らぬ顔で、頗る悠長に燻つてゐる。雨は次第に收まる。暫くすると奥の方から足音がして、煤けた障子がさらりと開く。中から一人の婆さんが出る。

どうせ誰か出るだらうとは思つてゐた。竈に火は燃えてゐる。菓子箱の上に錢が散らばつてゐる。線香は吞氣に燻つてゐる。どうせ出るには極つてゐる。しかし自分の店を明放しても苦にならないと見えるところが、少し都とは違つてゐる。返事がないのに、床几は腰をかけて何時迄も待つてゐるのも少し二十世紀とは受取れない。こゝらが非人情で面白い。その上、出て來た婆さんの顔が氣に

寶生
能樂の一派。
高砂
謡曲の番名。高砂
の相生の松の意に
とり祝言をのべた
もの。

入った。

二三年前、寶生の舞臺で高砂を見た事がある。その時、こ
れは美しい活人畫だと思つた。箒を擔いだ爺さんが橋懸
を五六歩來て、そろりと後向になつて、婆さんと向ひ合ふ。
その向ひ合うた姿勢が今でも眼につく。余の席からは婆
さんの顔が殆ど眞向きに見えたから、嗚呼、美しいと思つた
時に、その表情はびしやりと心のカメラに焼きついてしま
つた。茶店の婆さんの顔はこの寫眞に血を通はしたほど
似てゐる。

「お婆さん、ここを一寸借りたよ。」

「はい、これは一向存じませんで。」

「大分降つたね。」

「生憎なお天氣で、囁お困りで御座んしよ。おゝ、大分
お濡れなかつた。今、火を焚いて乾かして上げましょ。」

「そこをもう少し燃しつけてくれれば、あたりながら乾か
すよ。どうも少し休んだら寒くなつた。」

「へえ、只今、焚いて上げます。まあ御茶を一つ。」

と立ちあがりながら、「しつ、しつ」と二聲で雞を追ひ下げる。
こゝゝと駈け出した夫婦は、焦茶色の疊から駄菓子箱の中
を踏みつけて、往來へ飛びだす。雄の方が逃げるとき、駄菓
子の上へ糞を垂れた。

「まあ一つ」と、婆さんは何時の間にか、剝拔盆の上に、茶碗を

載せて出す。茶の色の黒く焦げてゐる底に、一筆がきの梅の花が三輪無雜作に焼きつけられて居る。

「御菓子を。」と今度は鶏の踏みつけた胡麻ねちと微塵棒を持つてくる。糞はどこぞに附いて居らぬかと眺めて見たが、それは箱の中に取り残されてゐた。



高曲の砂の姫

婆さんは袖無しの上から襷をかけて竈の前へうつくまる。余は懐から寫生帖を取り出して、婆さんの横顔を寫しながら話をしかける。

「閑静でいゝね。」

「へえ、御覽の通りの山里で。」

「鶯は鳴くかね。」

「え、毎日のやうに鳴きます。この邊は夏も鳴きます。」

「聞きたいな。ちつとも聞えないとなほ聞きたい。」

「生憎今日は——先刻の雨で、何處ぞへ逃げました。」

折から竈の中がばち／＼と鳴つて赤い火がさつと風を起して、一尺あまり吹き出す。

「さあ、おあたり。さぞお寒かる。」

といふ。軒端を見ると、青い煙がつき當つて崩れながら、微かな痕をまだ板庇にからんでゐる。

「あゝ、好い心持だ。お蔭で生きかへつた。」

「いゝ、工合に雨も霽れました。そら、天狗巖が見え出しました。」

逡巡として曇りがちな春の空を、もどかしとばかりに吹拂ふ山嵐の、思ひ切りよく通り抜けた前山の一角は、未練もなく晴れ盡して、老嫗の指さす方に、噴岫と荒削りの柱の如く聳えるのが天狗巖ださうだ。
(漱石全集)

一一 二宮翁夜話

福住 正兄

福住正兄
神奈川縣の人。二宮尊徳の高弟。明治二十五年(一八九二)歿、年六十九。
二宮翁
名は金次郎、後に尊徳と改む。神奈川縣(相模)の人。安政三年(一八五六)歿、年七十五。

人道はたとへば水車の如し。その形、半分は水流に順ひ、半分は水流に逆ひて輪轉す。全く水中に沈みなば廻らず

して流るべく、全く水を離れなば廻ることあるべからず。かの佛家にいふところの知識の如く、世を離れ(慾)を捨てたるは、たとへば水車の全く水を離れたるが如し。また凡俗の、教義も聞かず、義務も知らず、私



二 慾一偏に着するは、水車の全く水中に沈みたるが如し。共に社會の用をなさず。故に人道は中庸を貴ぶ。水車の中庸は、よろしきほどに水中に入りて、半分は水に

順ひ、半分は水を出でて、輪轉とゞこほらざるにあり。人道もその如く、天理に順ひて種を蒔き、天理に逆ひて草を取り、

慾に順ひて家業を勵み、慾を制して義務を思ふべきなり。

二

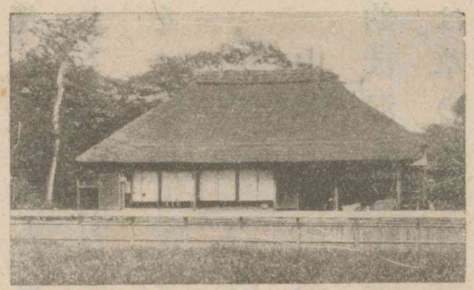
家屋のことを俗に「屋船」といふは、おもしろき言葉なり。家をば實に船と心得べし。これを船とする時は、主人は船頭なり。一家の者は乗合なり。世の中は大海なり。然る時は、この屋船に事あるも、また世の大海に事あるも、その災は共に遭れざるものなれば、船頭は勿論、この船に乗合ひたるものは、一心に協力して、この屋船を維持せざるべからず。さて、この屋船を維持するには、舵の取りやうと、船に穴のあかぬやうにするとの二つが専務なり。この二つによく氣をつくれれば、屋船の維持疑なし。然るに、舵の取りやうにも

本

心を用ひず、屋船の底に穴あきても、それを塞がず、安閑として過こさば、屋船はやがて沈没せん。歎息の至ならずや。

三

物に一得あれば、一失あるは世の常なり。人の衣服におけるや甚だ煩はしく、四季折々の氣候に合はせてこれを仕立て、または縫ひかへ、洗濯などして、常に休む時なし。さればうち見たるところ、禽獸のおのづから羽毛ありて寒暑を凌ぎ、生涯損ずることなく、染めずして色彩あり、何の世話も要せざるに如かざるやうに思はる。されど、よく考ふれば、羽毛



二宮尊徳の生家

につける蚤虱、羽蟲などによりて絶えず惱まざる、禽獸よりも衣服を自由にぬぎ着洗濯などして安らかなる人こそ遙かにしあはせなるを知るべし。うはべのみを見て、輕々しく他を羨むは、衣服を用ふる人よりも、羽毛を有する禽獸をまされりとする類なり。

四

山芋掘は山芋の蔓を見て、芋のよきとあしきとを知り、鰻釣は泥土の様子を見て、鰻の居ると居らざるとを知り、良農は草の色を見て、土の肥えたと瘠せたとを知る。こは即ち「至誠神の如し」といふものにして、永年刻苦經驗して發明せるところなり。技藝にこの事多し。侮るべからず。

至誠神の如し
至誠如神、(中庸)

五

大事を成さんと欲せば、小事を怠らず勤むべし。小積もりて大となればなり。小人は大事を欲して、小事を怠り、出来難き事を憂ひて、出来易き事を勤めず。故に大事を成すこと能はず。これ小の積んで大となることを知らざるに由る。たとへば、百萬石の米といへども、粒の大なるにあらず。萬町の田を耕すも、その業は一鋤づつの功にあり。千里の道も一歩づつ歩みて到る。山を作るも一簣の土より成ることを明らかに辨へて、勵精、小事を勤めなば、大事必ず成るべし。小事を忽にする者には、大事は必ず出来ぬものなり。

(二宮翁夜話)

高濱虚子
名は清。愛媛縣松
山の人。俳人。文
學者。

一二 叡山の鳥

高濱 虚子

寢床を出て、榻枝（たざし）を使ひながら湖水の見える部屋にいつて見る。朝日が部屋一杯にはいつて居る。

湖水と思はれる邊は雲ばかりで何も見えぬ。富士の頂上から雲海を見下したのと似た景色だ。部屋の下は東谷になつて居るので、我が眼よりやゝ高く、やゝ低く、數知れぬ杉の梢が鉾のやうに突立つて居る。左手には北谷の向うに當る杜が、鋸の齒のやうな杉を背に並べて湖の方に流れて居る。空氣がいやが上に清いので、近景の杉の梢も遠景の杉の梢（も）も新鮮な色をして居る。さうしてその間を薄い

部屋

比叡山東塔の宿

湖水
琵琶湖

霞（かすみ）が流れて居る。非常に静かだ。自分の呼吸の外、うき世の物音は何も聞えぬ。

たゞこの天地を我が物顔に啼きさへづつて居るのは小鳥だ。何といふかはいゝ聲の小鳥があるものであらう。名が分らぬのが残念だ。その杉の梢で一羽啼いて居る。彼方の杉の梢で他の一羽が答へて居る。又遙か向うの谷深く他の一羽が應じて居る。よく耳をすますと、なほ二三次の聲がどこかで聞えるやうだ。

この小鳥の合奏を破るやうに、別な聲の小鳥が突然その間に高音を張る。前の小鳥ほど優しい聲ではないが、また凜々しい所があつて、その聲の空山（そらやま）に響く趣が何ともいへ



やまどり

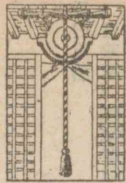


比叡の峰 (岩正巳筆)

ぬ。是も名は分らぬ。それが一羽ではない、三羽四羽と段段聲の主が殖えて来る。前の小鳥が縦糸なら、この小鳥は横糸だ。互に錯綜してよく諧調を保つ所が面白い。突然けんくとけた、ましい音が谷を横ぎる。此方の谷にも響けば、彼方の峰にも響く。昨日聞いた雉子の聲より稍急調だ。山鳥でもあらうか。前の二つの小鳥で織成した美しい絹を、唯一聲に引裂いたかと疑はれる。暫くして、その聲は谷の底の底、峰の奥の奥に浸みこん

ま

鱧口



啄木鳥



でしまつて、あとはもとのとほり静かになる。眞先にその静けさを破るものは鶯の聲だ。絹に置かれる緋のやうに美しい。一つの緋が置かれると、また縦糸を織つて前の小鳥が啼く。また横糸を織つて次の小鳥が啼く。緋が鳴く。縦糸が鳴く。横糸が鳴く。この絹をまた山鳥が破るのかと思ひながら、待設けて居ると、不思議な聲が別に起る。それは麓の里の池で聞く蛙の聲によく似て居て、谷の神社の鱧口が口をあけて、つぶやくのかとも思はれる。他の鳥の聲々が皆高調で晴々とした中に、獨り低調で不平らしい音を出すのが面白い。友は啄木鳥だらうといつた。二人の和尙は山鳩だらうといつた。

湖水の上にはまだモク漠々とした白雲が漂つて居る。杉の梢を渡れる霧は少しづつ薄らいで来て、だん／＼と谷が深く見えて来る。
(新寫生文)

一三 オリムピック大會の今昔

行 田 重 治

行田重治
運動家。東京日日
新聞記者。昭和五
年歿。

世界的最大行事は果して何かといへば、いろ／＼な行事よりぬきのかうのもが數へられようが四十また五十有餘國の精銳「わしが國さ」の代表を世界の一角に集めて、人種の優劣を競ひ、世界的順位を争ふ萬國オリムピック大會——これこそ世界的最大行事といはねばならない。

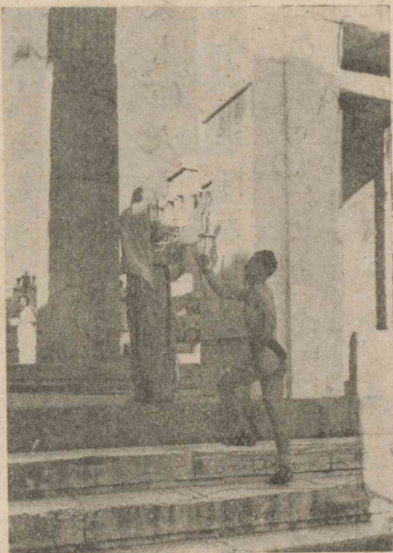
萬國オリムピック大會——これは既に三つ兒も知る世

界的な共通語となつてしまつた。オリムピックといふ言葉が何を意味するものであるかを知らない者が、今日果して幾人あらう。一度「わしが國さ」の代表を遣つた國は、朝野舉つて母國選手の健闘を祈り、その結果を鶴首する。政治家も、軍人も、青年も、老幼も、あらゆる人々を熱狂させるのが、現今四年目ごとに行はれる萬國オリムピック大會である。このオリムピック大會はいつ、いかなる姿をもつて發祥したものであらうか。

古代ギリシヤでは、國民大祭として、毎年一つづつ大祭を行つてゐたが、その大祭は四つあつて、四年で一巡したものである。その四つのうち、最も有名なのが即ちオリムピア

エリス
希臘ペロポネサス
半島の西北。
ゼウス
希臘諸神の主宰
者。オリムプス山
に鎮座する。

大祭で、ギリシヤ聯邦の一なるエリスの海岸にあつたオリムピアといふ一寒村に、ゼウスといふ神が祀られてゐて、このゼウスの神意を慰めるために行はれたのであつた。祭典は四年目に一回づつ、夏至即ち六月二十一日の次の第一の満月の日から四日間行はれ、その前後一箇月の間はギリシヤの各邦は絶対に戦争をしなかつ

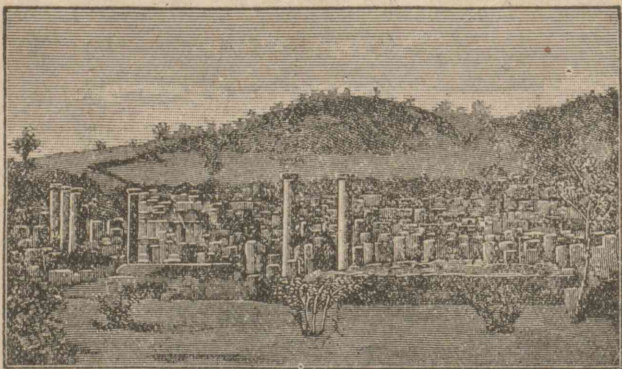


セウス神に於て火を手に授く

た。またこの競技會に出場すべき者は、各邦から選ばれた粒選りの精銳で、しかも純ギリシヤ人の血を受け、政治上、道

徳上、並びに法律上の刑罰を受けたことのない者に限られ、全く缺陷のない人格者でなければならなかつた。これを以て觀ても、いかに祭典の崇嚴と競技の神聖とが期せられてゐたかが知れよう。

競技の種類は主として短距離競走であつたが、フィールド競技では、圓盤投、槍投、その他跳躍、レスリング、ボクシングなど、特殊なものとしては戰車競走、騎馬競走、組合せ競技として幅飛、圓盤投、槍投、徒歩競走、レスリングの五種をとり



オリムピア競技場の廢墟

フィールド
走路によつてかこ
まれた中央の競技
場。
レスリング
西洋流の相撲。む
しろ柔道に近い。
ボクシング
拳闘。

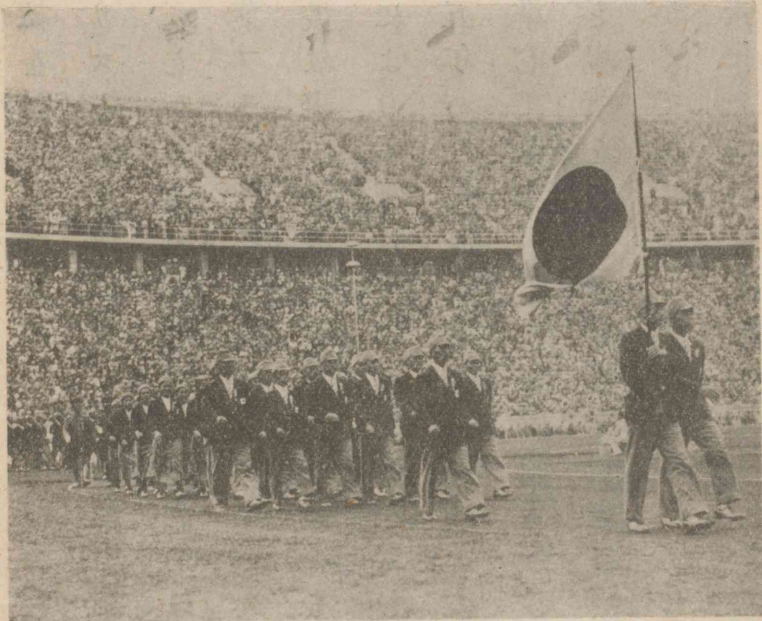
オリブ
橄欖樹、即ち月桂
樹。

アテネ
スバルタ
ともに古代ギリシ
ヤ聯邦の國々で、
アテネは文を以
て、スバルタは武
を以てギリシヤの
兩中心となつた。

まぜた五種競技などが行はれ、その眞剣さと熱のある點と
は言語に絶するばかりであつた。だから、この競技會に優
勝した者は、物質的な賞品の代りに、この聖地に生じたオリ
ブ樹で作られた冠を授けられ、公衆の限りない歡呼を受
けたものである。さうして更に神域の一部にはその像が
建てられ、詩人は彼を謳ひ、彫刻家はモデルにし、また作家は
劇の主人公に選んで名譽を表彰し、彼の名前は直ちに年號
に用ひられるなど、その優勝者を出した一家一門、並びに各
邦の名譽は、實に輝かしいものであつた。
アテネ・スバルタの文武が謳歌されたのも、この當時で、オ
リムピア祭典の影響は、やがてかの燦然たるギリシヤ文明

第一回舉行
西曆前七七年。

テオドシウス
東ローマの皇帝。
キリスト教の興隆
をはかつた。西曆
三九五年崩。



第十回オリムピア大会に於ける日本代表選手入場の
先頭は日章旗は秩父宮殿下に賜る

をもたらし、ギリシヤ
の全盛期を形づくつ
た。然るに、この祭典
も、ギリシヤの衰退と、
その文明の凋落と共に、
第一回舉行後二百
九十八回目、西曆紀元
後三百九十四年に、テ
オドシウス大帝によ
り、一切のギリシヤ・ロ
ーマの舊い宗教を國

法を以て嚴禁することゝなつたので、オリムピア競技は、キリスト教文明のために終に中絶する時が來た。

しかしその廢絶後千五百年以上も經つた十九世紀の末葉、フランスに男爵クウベルテンといふ文筆家があつたが、彼は青年の遊戯並びに體育に熱心であつた結果、その斡旋により、萬國體育委員會といふものが組織され、千八百九十五年、パリに於て第一回會合があり、古代オリムピア競技に準じて、四年目ごとに國際大競技會を催し、且その開會の時と場所とは、その都度委員會に於て決定することゝなつた。かくて復活後の第一回オリムピック大會は、翌千八百九十六年の四月に、その由緒も深い古代ギリシヤ文明の搖籃地

であるギリシヤの首都アテネに於て盛大に催された。

日本はスウェーデンのストックホルムに行はれた第五回オリムピック大會以來、代表選手を派遣し、各選手は陸上に水上に盛んに活躍して、日本のために萬丈の氣焰をあげ、日本をして世界的スポーツの新進國たらしめた。

一四 若人六千の大打進

世界の若者が大空の下に命を打込む争ひ、それがオリムピック大會だ。世界の若者が大地の上で手を握り合ふ歡び、それがオリムピック大會だ。一人も殺すことなく人間の争闘精神を生かして平和の裡に正々堂々勝負を決める、

ストックホルム
瑞典の首府。
第五回オリムピック
大會
西曆一九一二年。

クロノス
オリムピアの東北
郊外にある丘陵。
ゲルネワルト
伯林郊外の閑静な
地域。
アルフオイオス河
オリムピアの郊外
南方を流れる河。
ワンゼー
伯林の南方を流れ
る河。
ロサンゼルス
アメリカのカリフ
オルニヤ州南部に
ある大港市。

それがオリムピック大會だ。
歴史は二千七百年、行程三千八百キロ、路はギリシヤに通
ずる遠くオリムピアの發祥地から聖火を運び、世界の若者
の胸に古代オリムピアの精神を呼び起すのだ。クロノス
の森に比すべきゲルネワルトの森、アルフオイオス河に譬
ふべきワンゼーの水、オリムピアの遺跡さながらの神域に
建てられた巨大な競技場、そこに世界の若者を集めて、今日
しも千九百三十六年の八月一日、第十一回オリムピック大
會が開かれた。參加五十二國、選手の總數六千名、ロサンゼ
ルスの前大會の三十九國、二千五百名に比して何といふ進
展振りだ。空前の盛觀の下に今より十六日間、大和魂を始

め世界中の負け嫌ひの魂がぶつかり合つて火花を散らす
のだ。

北歐の夏空は生憎の曇天で、やつと持ち耐へた。ファイ
ルドの緑の芝生、赤土のトラックに白線くつきりと描かれ、
十萬を入れるスタヂアムは早朝からぎつしりと觀衆に
埋められて身動きも出来ない。午後二時ヒンデンブルグ
號は銀色の巨體にオリムピックのマークを描き、オリムピ
ック大會旗を靡かせて、スタヂアム上に偉容を現はした。
早くから詰めかけた觀客は拍手して之を迎へた。窓から
乗客が小旗を振つてゐるのが手に取るやうに見える。午
後三時、第一回大會のマラソン優勝者ルイス君が橄欖の枝

トラック
競走路。
スタヂアム
運動競技場。

マラソン
マラソンレースの
略。長距離競走。

ヒトラー
獨逸國の總統。



ヒトラー總統のオピエツクツク開會宣言

を持つて現はれ、フィールドを横切つて定め席に就いた。定刻四時(日本時間二日午前零時)國歌に迎へられて、ヒトラー總統着席すれば、世界の若者を呼ぶ鐘の音がマラソン塔の上から莊嚴に響き渡つた。瀏亮たる行進曲と共に祖國の榮譽を一身に擔つた若者が、オリムピック發祥地ギリシヤを先頭に、主權國ドイツを殿としてアルファベツト順に入場して來た。

中央主賓席をよぎる毎に國旗を垂下して敬禮を行へば、

大島主將
大島謙吉。三段跳選手。
平沼團長
平沼亮三。貴族院議員。大日本體育協會副會長。伯林大會に於ける日本選手團長。
ブレザーコート
運動用の色染短衣の一種。

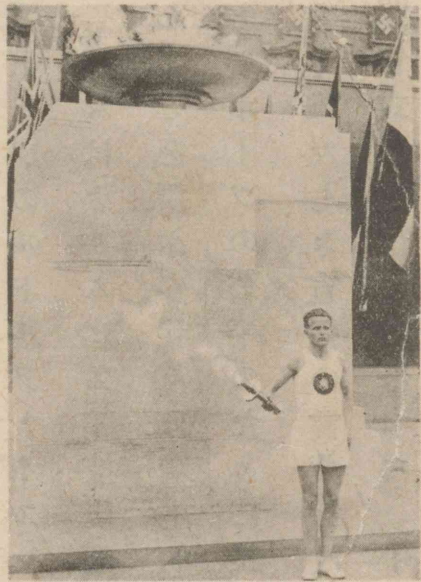
小池……
水遊選手・小池禮三・清川正二・遊佐正憲・牧野正藏
前畑秀子。
西田……
西田修平・大島謙吉・吉岡隆徳・村社謙平。

其の度に號砲が轟き渡る。日本は第廿五番目に國名標と大島陸上主將の捧持する秩父宮殿下御下賜の榮ある日章旗を先頭に、平沼團長以下選手役員二百四十七名、何れも胸に日の丸のマークをつけた紺色の恩賜のブレザーコートに身を固め、必勝の意氣を眉宇に閃かせて、歩武堂々行進して來た。二十四年前の初參加の二名に比して何といふ躍進振りだ。

五列縦隊中には世界に名を知られた水の小池・清川・遊佐・牧野・前畑嬢もある。陸の西田・大島・吉岡・村社もある。其他新たに世界の覇者たらんとする新進が雲の如くある。世界の何人も否定出來ないのは日本の存在と二十四年間の

躍進振りだ。大競技場を埋めた十二萬の觀衆が吾等の代
 表に贈る拍手の嵐が之を證明してゐる。ちぎれよとばかり
 振り振る日の丸の小旗、負けるな、しつかりやれと咽喉も張り
 裂けるばかりの聲援。さうだ、ベルリンを中心に歐洲に在
 留する同胞が、吾等の代表を勝たしめようと全部集まつて
 組織した應援團、三千里の道を遠しとせず遙々母國から馳
 せ參じた健獎會の人々が、三ヶ所に頑張つて、日の丸の小旗
 を振りつゝ、日本選手團に熱烈な聲援を贈つた。

整列が終つて、オリンピック組織委員長レワルト博士の
 開會の辭の後、わが世の春に醉ふヒトラーヒトラー總統が力強く第
 十一回大會の開會を宣した。同時に平和の使者五千の鳩



聖壇に点火されたる聖火

がパツと舞ひ上る。祝砲が殷々と響いて胸を打つ。シユ
 トラウス氏の指揮するオリンピック讃歌の演奏が濟むと、東
 の門がサツと開かれ、遠く
 オリンピアの遺跡から七
 ケ國三千餘人のリレート
 運ばれた聖火！その最後
 の走者ソトリオス・ルイス
 君が場内に現はれた。

聖火はスタンドの上に作られた聖壇に点火された。この
 火は晝となく夜となく十六日間燃え續けるのだ。復活第
 一回オリムピックに優勝したマラソン走者ギリシャ人ル

イス君が、オリンピックの遺跡から飛行機で運んだ橄欖の一枝をヒトラー總統に獻ずるを待つて、五十三ヶ國の旗手が各、國旗を捧げて式場の周圍に集まり、半圓を造つた。主催國ドイツのルドルフ・イスマー選手が全選手を代表して、

「我々はオリムピア競技規則を遵奉し榮ある競技者たらんことを誓ふ。我々は騎士的精神を發揚し、各母國の名譽とスポーツの公平のために競技に参加せり。」

と雄々しき宣誓の言葉を放ち、六時十五分莊嚴比類なき開會式は茲に全く終つた。午後九時から「オリムピアの若者」といふ野外劇が行はれ、ギリシヤの昔を偲ばしめた。明日からいよいよ光榮ある祖國の名に於て我等の代表

が戦ふのだ。屍を楯にのせられて歸つた古代ギリシヤ人の意氣を以て、精根を盡し、倒れるまで戦へ！御身等の後には一億の同胞が勝利を祈つてゐるではないか！

(東京朝日新聞)

一五 日本アルプスの空

鈴木文史朗

鈴木文史朗
千葉縣の人。名は
文四郎。東京朝日
新聞社員。
メルクル機
ドイツ製の單葉飛
行機的一種。
松本
長野縣松本市。

我がメルクル機は、かうして六百馬力を六百馬力回轉させて松本の上空をぐんぐん上昇し續ける。それは、下から見たら、子供が兩掌に力をこめてもみ上げた竹とんぼが、唸りを生じて、空高く飛び上るやうでもあつたらう。とんぼが三千五百メートルで止まつて、右に大旋回を始める。

一直線に北進する。この兩眼が寫眞のレンズだつたら！
乗組員四人は入り亂れて右の窓、左の窓からのぞきこむ。

「富士が見える、富士が見える……」
四つの頭が一度に窓から後ろ
を振向く。機尾の上に、木版で押し
たやうな眞碧の富士の頂が、五寸ほ
ど白雲の上に突き出てゐる。その
下には、乗鞍、御岳をめぐる山岳峰
陣笠と烏帽子兜の大軍。
機の眞下には山の力を象徴した



穂高岳
(空の旅の地圖に示す)

前穂高が聳える。唐澤の谷めがけて、奥穂高から雪が白い

乗鞍岳
標高三〇二六米。
御岳山
標高三〇六三米。
奥穂高岳
標高不明。一説に
三一九二米といふ

梓川
常念岳と槍岳との
間に發源し松本市
の西北で奈良井川
と合して犀川とな
る。

トナゲ
蜥蜴のやうになだれ込んでゐる。

もう一度上高地を振返る。梓川が机の下を這ふ蚊遣線
香の烟のやうにはのかだ。

遂に槍だ！穂高の上から數分間、腕時計を見てゐる暇
もなく、北アルプスの最高座、一萬尺の槍の尖端が窓の前に
突き出た。「痛酷にして赤裸な威嚴」どこから觀ても槍岳
の形容は、この一句に盡きてゐる。少しでも山に登つた者
は、恐らく誰でも感ずる一種の感傷——山岳の崇嚴に頭を
さげる無我の哀感——さういふ感じがこの時ほど強く筆
者を襲つたことはない。「好い寫眞を撮つてくれ！フィルム

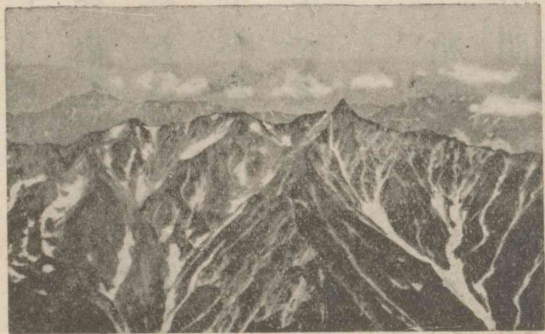
「ムはい、かね？」——思はず怒鳴つたが、その聲は我ながら
 亢奮してゐる。この亢奮は無論一基の槍のためばかりで
 はない。槍を圍繞する遠近無数の高岳が形成する、四邊の
 全體的の效果だ。大將軍を大將軍に見せる綺羅星と居並
 ぶ大名小名の威容だ。

寶の山へわけ入つた慾深男が、あれもこれもと見回はず
 であらうやうに、僕は右の窓と左の窓の間を、何度となく身
 をかはした。右窓からは、さつき通つて來た淺間の入道が
 黒紗をかぶつた尼僧に化けて細々と香煙を立ててゐる。
 その遙か後ろには、赤石の連峰が形の崩れた圓塚のやうに
 竝んで、その根元は雲の大原野になつてゐる。左の窓には、

淺間山
標高二五四二米。
活火山。
赤石山
標高三二二〇米。

大喰岳
標高三一〇〇米。
中岳
標高三〇六〇米。
笠ヶ岳
標高二八九八米。

東鎌尾根
槍ヶ岳の頂上より
東方へ走る山稜。



槍ヶ岳
(るよにL旅の地旅の空)

槍の番人のやうに、大喰中岳が二の腕の力瘤を持ちあげて
 ゐる。笠の連峰がその後ろにM字を押しつぶしたやうに、
 或は半開きの屏風のやうに擴がつ
 てゐる。
 直ぐ眼の下、機體の影からは、槍澤
 と東鎌尾根の深谷が、槍の穂先めが
 けてA字線に駈け上つてゐる。萬
 年雪が鎌尾根の谷を最も深く埋め
 てゐる。お、寒！窓から吹きこ
 む風が、師走の朝の木枯である。だ

が、文化住宅の應接間のやうに、この旅客機の中では窓さへ

閉めれば、シャツ一枚で居られる。それに、今外套のシャツのと着てゐられるものか。昨夜立川の宿屋に乗組員一同合宿した時の寝物語は「アルプスの上で落つこちたら誰の胴だか首だか分らなくなるぞ。」と冗談にも話し合つたものだ。機は四千メートル——富士山の頂上と同じ高度で進んでゐる。

槍の穂に止まつた蟬のやうに小槍が見え出す。峰と峰の間の無限谷、戦慄の谷から積亂雲が急に泳ぎ出る。岳と岳の巖の雪が、岳の彫刻線を明確にし、谷間をゆく白雲が岳の走線を浮彫にする。

「おい、少し雲が出て来たぞ。」

「これくらゐなら大丈夫だ。」

「寫眞には却つて變化があつていゝ。」

「寫眞にはいゝかも知れないが、飛行機は揺れたすぜ……。」

だが、機は全く揺れない。アスファルトの道路の上を高級自動車で走るやうな滑かな進行だ。アルプスは谷が深い、岳が切り立つてゐる、氣流が悪い、百尺二百尺の空中穴の二十や三十は覺悟しろと恫喝されて乗つて来たものだが、来て見ると、張合のない程の平滑さだ。これに比べれば、立川飛行場を飛び出す前の滑走の方が、たしかに荒天の大難航だつた。

116E

硫黄岳 標高二〇九四米。
 湯俣岳 標高二三七九米。
 常念岳 標高二七五七米。
 東天井岳 標高二八一米。
 大天井岳 標高二九二二米。

眼の前に見えた槍が見る／＼小さく後ろに走る。それでも、あの鋭い尖端は、沖の暗礁の上に立つ燈臺のやうにくつきりと出てゐる。誰か奇特な人があつて、あれをアルプスの飛行燈臺としたら、どんなに飛行家を裨益することだらう……などと、空想的な思ひつきが浮ぶ。

このあたりは、槍に率ゐられる硫黄湯の俣の線に並行してゐる常念・東天井・大天井の線が重なり合つて北に走つて見える。ほんとの山鯨の群だ。地層の最下に沈澱すべき片麻岩が日本全國中で最高點に現れてゐるといふのでも有名な常念のピラミッドは、機上からは六十五度以上の鋭角に擴がつてゐる。さうだ、一萬尺以下の岳の線はみんな

鈍角に擴がつて、地上から仰いだ形と變つてゐる。

常念・大天井を過ぎると、二頭の猛牛の脊筋が並行にならんだやうな、二條の力線。その向うには拳固をつき出したやうな、筋太の手の曲線——野口五郎岳・赤牛と、は、よくぞ名づけた。跨がつて見たいやうな尾根續き。五郎岳も黒牛とでも呼びたい黒い脊筋。灰色の布でつくる舞臺の牛のやうに、皺が大まかに思ひきつて引つばられ、描かれてゐる。

穂高から白馬に向つて、どの山も谷も、皆相變らず北走してゐる。そして、その強靱な力はどうだ。北アルプスは日

野口五郎岳 標高二九二四米。
 赤牛岳 標高二八六四米。
 藥師ヶ岳 標高二九二六米。

本本土の屋蓋（屋根）で、穂高から檜白馬の線はその上棟だといふが、なるほど一國の大屋臺骨の棟梁の貫祿はある。どしつとしてゐる。

機は依然として微動だもしない。中島飛行士と片桐機關士はどんな格好をしてゐるか、と三四歩歩いて行つて、ドアをあけて見る。氷のやうな突風が一目算に駈けこんで來て、原稿用紙が室の中にまきあがる。我々の席より一段高い座席に、二人が彫刻像のやうに竝んでゐる。左の中島君は、セルロイドの氣流除けを通して、前面に眼を配り、兩手で自動車と同じまるいハンドルを握つてゐる。片桐君は枕時計の面を幾つも張りつけたやうな計器板をちつとに

中島飛行士
名は忠英。
片桐機關士
名は庄平。

らんでゐる。――回轉計高度計速度計沈壓計冷却水溫度計傾斜計、それから羅針盤……皆時計の秒針のやうに、忙しく回轉してゐる。人間の科學がつくつた巨鳥の腦神經と翼筋の集合所だ。中島君のハンドルは動かない。機は水平に進むだけだ。

「馬鹿に静かだね。」――伸び上つて大聲を立てると、二人がにやつと笑つて、こつちを向いた。片桐君のやさしい糸のやうな目、中島君の皿のやうな張り切つた目。「もう二三分して、のぞきに來給へ……」計器板の針が、一度にみんなくるくる回りだすよ……」二人が意味ありげに笑ひながら僕の兩方の耳へどなつた。

（空の旅地の旅）

川路柳虹
名は誠。東京の人。
詩人。美術評論
家。

夜の神妙

一六 雲海

川路柳虹

山上のキャンプに
吾れ、親しく星と語りぬ。
肌さす夜氣に
天幕の夢より醒め、
燦爛たる夜空を仰ぐ。
寂として聲なき眞夜なか、
たゞきゞしは天の聲のみ、
星は無言に語り、吾は無言にきく――
宇宙の言葉、宇宙の心、
あまりにも高く、あまりにも淨けき。

曉の雲海

今、見るは曙、
岩根の露かゞやきて、
千古の雪、薔薇のごとく
紅らむ朝の光に映ゆ。
われ、いづこにありや。
身をつゞむものは天衣か、
見るはたゞ雲の海、
前も、うしろも、わが來し道も、
波のごとく打ちよせ群る
雲の海、雲の浪、雲の潮、

はしや西朝者(三)取らうしゆ(左) 九二

かゝるたゞなかに
血よりも燃えたる太陽、
王者のごとく雲の上へのぼるを

われ無言に禮拜す、

あまりにも氣高く、あまりにも淨き姿に。

一七九十九里

徳富蘆花

古事記に、伊邪那岐命黄泉の國から命からん、現世に逃げ歸つて、身の汚れを清めん爲に、筑紫の日向の橘の小門の檍原に往つて、海水を浴び、禊し祓し給うたといふ記事があります。

徳富蘆花
名は健次郎。熊本縣の人。文學者。昭和二年没、年六十。
古事記
元明天皇の和銅五年、太安麿が禊田阿禮の口傳によつて我が國古代の神話及び歴史を記したるもの。

「死の蔭に」
朝鮮滿洲地方旅行記。
山の上の仁泉亭。
伊香保温泉仁泉亭。

武藏野の生活
東京府北多摩郡千歳村大字粕谷の住居を指す。



徳富蘆花

大正六年の三月に、「死の蔭に」を出して死の蔭を出た私は、山の上の仁泉に、妻諸共新生の春四十日が間産湯を浴びた後、更に夏の一月を、永劫の動搖、永劫の戦闘の中に飛込んで、其處から乏しい私共の戦闘力を擱んで來ることを思ひ立ちました。私共の心は海に騁せたのであります。私共が相州逗子の生活は最早十七年の昔になりました。武藏野の生活をはじめからでも、最早十年の餘になります。海が遠くなつた。海へ往かう。禊に往かう。全人を鹽しに往かう。闘ふ力を養ひに往かう。海、海に限る。

九十九里
千葉縣。大東岬よ
り飯岡に至る砂
濱。

それも逗子のやうなやさしい海ではつまらぬ。大洋へ往かう。荒海へ往かう。力強い大濤の脈搏つ外洋へ往かう。「九十九里——さうだ。九十九里へ往かう」と私は叫びました。而して私共は家を舉げて、七月一日に九十九里へ参つたのであります。(終)

飯岡の岬
千葉縣海上郡飯岡
町にある岬。
大東岬
千葉縣夷隅郡大東
村にある岬。

約七千里の海岸線を有つ本州日本には、日本海方面にも、太平洋面にも、随分長い砂濱はありますが、上總の九十九里位美しい濱はありません。北、飯岡の岬から、南、大東岬まで六町一里で九十九里、實測で十六里半の砂濱は、其處に其美しい形を破るべき一の小山一の岩礁だになく、永劫に白波

蹴立てて襲ひ寄る大東洋に對して、弛む時ない半月の弓をじわりと張つて受けとめてゐます。九十九里の懷は浅い。最長徑が三里には過ぎない。併し、胸は闊い。十六里半に及んで居ます。右に大東、左に飯岡、此二つの岬を兩腕と伸ばして、十六里半の織い細い軟かな砂は、雄哮して跳りかゝる大東洋を慈母のやうな其胸にやんわりとかき抱いて居るのであります。此の大きな胸の言はば鳩尾が片貝町です。片貝から南に隣して豊海村があります。其の字の一つなる粟

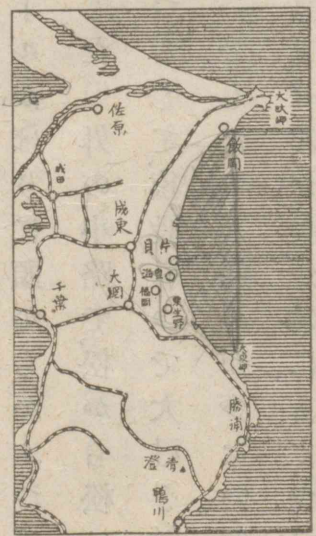
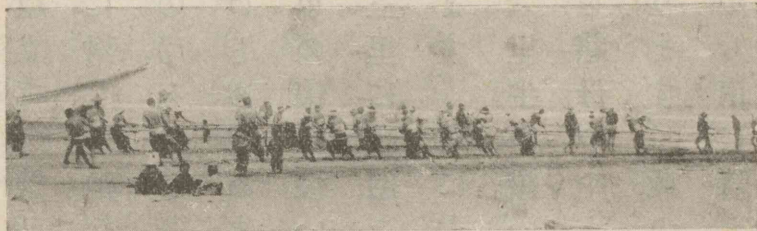


圖 地 里 九 十 九



九十九里の地の曳網

生の里に、私共は七月一ばいを過しました。九十九里の七月は涼しい。もつと暑くてもよい、と思ふ程涼しいのでした。起きぬけに一度、午後一度海に入る外は、朝の地曳の魚買ひ、夕蔭の散歩、日ざかりには白蚊張をゴールがはりに頭からかぶつて晝寢をしました。外の小路で、松から松に細引的をつるして、猿股一つで大弓を射るのも、樂の一でした。人通りが少ないので、危険はありませんが、矢が砂にもぐつたり、

茉莉舎
作者がゐた栗生の
別荘の名。

松林にそれたりして、時々探すに骨を折りました。其様な時は毎日の様に、胡瓜、茄子、隠元、何くれと野菜を持つて來てくれる裏の五ちゃん、が、子供の眼さどく探してくれました。粕谷から持參の朝顔が茉莉舎の手水鉢の下の籠に絡んで咲く頃には、庭の草地できりぎりすが鳴き出しました。七八歳の昔、水泳歸りのくたびれ耳に、河原で聞いた其の聲が、夢の様に蘇つて來ました。

茉莉舎からは、庭の小松を見越して、鱒煮る家の、今は煙も絶えて居る煙突のはづれから、ほんの少々ながら海が眺められます。七月の日が赫々と照つて、十數里の沖を流るゝ黒潮の、まだ其の先の先の限りない先きから、海原を

掃うて来る南風が氣を入れてしつかり吹く日は、濃い緑青の海に雪の波の跳り上り跳り上りするのが、茉莉舎の縁から見られます。此の様な日には、頭上の大空では、天を中斷するやうな、素晴らしい白旗雲が見る／＼靡いて北に流れ、茉莉舎を圍む何千株の若松の限りない松葉の一つ一つが、風に競うて南風の曲を歌ひます。人の靈魂を梳いて行くやうな颯々の其の音は、私共の存在を清々しくせずには措きません。

海の氣分もいろ／＼に變ります。風と日の調子を合はせて乗地になつた花やいだ氣分の日もあります。催眠藥の霧などかけられて、九十九里の其の懷にさながら眠つた

やうな日もあります。憂空薄曇つて、さしもの荒海が嗚咽するやうに聲を呑む日があります。かと思へば、凄じい怒を起して轟と吼えつゝ、千尋の底から湧き上り、煮えくり返り、轟と崩れては再び地心へ轟と捲込んで行く勢に、九十九里の陸はをのゝき、茉莉舎などは木の葉の如く震へる心地の日もありました。(茉莉舎) (新春)

文章の山

八波 則吉

「山の無い文章は川の無い平野のやうなもので、讀者に沙漠の荒涼を感じさせます。沙漠の中にさへ沃地があります。線滴り泉迸る沃地は即ち沙漠の山です。文章に「山」が無ければ、無味

八波則吉
福岡縣の人、第五
高等學校教授。

乾燥、恰も蠟（みかろういし）を嚙む（かむ）に似たものがありませう。

さて文章の「山」は何處に置くべきか。一概には申されませんが、理想としては文の結尾に置くべきです。少くとも結尾に近く置くべきです。

蘆花氏の「新春」に「九十九里」と題する文章があります。その序論とも見るべき「襖」の後半は斯うです。……:

諸君、この文章の山は何處でせう。

いふまでもなく、「九十九里」——さうだ、九十九里へ行かう。です。「海が遠くなつた。」から徐々に進んで、「海、海に限る。それも逗子のやうな海ではつまらぬ。」と、軽く前に應じて、「大洋へ往かう、荒海へ往かう。力強い云々。」と、重ねて、「九十九里」——さうだ。」と、自答し、「九十九里へ行かう。」と、断定するところ、正に千鈞の重みがあり

ます。「そして私共は」と言つて、「山」を少し下つた處で文を結んであるのです。

若しこの「襖」の一文にして、「九十九里へ行かう。」の一句が前半又は後半の上部に點出してあつたら、吾々を喜ばすこと、決して、之を結尾に見出した時ほど強くはなかつたに極つてゐます。

諸君、「山」の置場所は即ち文の死活問題です。

(即席と宿題)

一八 初學者のために

島崎藤村

十七八歳の頃、私は隅田川でよく泳いだことがある。全く水には経験のなかつた私も、漸く岸を離れることが出来るやうになり、次第に川の中流までも進み得るやうになつ

島崎藤村
名は春樹。長野縣の人。詩人。小説家。
十七八歳の頃
明治二十一年二月
隅田川
荒川の下流。主として千住大橋より下流、舊東京市内に屬する部分を指す。

ナニカヨリ
トライアド
クニエタ
クニエタ

て、一夏も水泳場へ通ふうちには、向うの河岸まで泳ぎ越すことが出来た。

更にまた一夏も泳いで見たら、焦つて水ばかり飲んで居た頃にはよくも分らなかつた水瀬の速い遅いも分つて來たし、眞水と潮流の混り合つたあの川の中の冷いと温いも分つて來たし、水鳥のやうに浮きつ沈みつする他の泳ぎ手の光景を泳ぎながらに見ることも出来た。

板子なしには溺れるの外なかつた私も、二夏の末には、優に隅田川を往復した。私は、普通の泳ぎ手が行けるところ迄は、自分も到達し得たやうに感じた。けれども、それ以上に進むことはなかく、容易でなかつた。私の身體は水に

重かつたから、樂に浮身の出来る人を見たり、拔手の上手な人なぞを見た時は、全く感嘆してしまつた。文章の道にも、誰にでも到達し得られるやうな境地があるに相違ない。そして「根氣」さへあれば、そこまで行くことは決して難くないに相違ない。

信州の小諸にゐた頃、私は弓をやつたことがある。誰でも、最初のうちは、的に向つて矢を當てることばかりを心掛ける。唯當りさへすればいゝ。さういふ時代には、幸に一本の矢が的を貫くことはあつても、他の矢は思ひも寄らぬ場所へ飛んで行く。射手の心に頼むところもなく、矢の曲

直を辨別する力もなく、さうして幸に當つた矢は、高慢で煩しい「熟練」を思はせるばかりだ。

小諸に住む舊士族（士族のよ）の一人で、弓術に心得のある老人が私達の矢場へ來た。その老人が先づ「姿勢」を正す事を私達に教へて呉れた。それからの私達の矢は、假令的を貫くことが出來ないやうな場合でも、一手揃ひで同じ場所を行くやうになつた。是は文章の道にも宛嵌めて見る事が出来る。唯好き文章をのみ作らうと思つて焦心する事は、決して目的を達する道でない。眞に好き文章を作らうと思ふ者は、どうしても先づ「自己」から正してかゝらねばならない。

同じ頃、私は家の裏にある畠へ出て、鋤を執つたことがある。讀書のかたはら、よくその鋤を擔いで行つて、土を耕して見た。私は先づ荒れた畠の地面を掘起すことから始めた。土を碎いた。小石を擇り分けた。地ならしをした。汗を流してそれをやつた。葱の苗や馬鈴薯の芽のやうな植ゑ易いものから作つて見た。その畠には、大根・白菜・茄子・豌豆・胡瓜などの類をも植ゑて見た。馬鈴薯の花が白くさかりな頃に出て、試みに土の中を探つて見ると、はや丸いやつが幾つもの根元の方から出て來た。豌豆の蔓が長く延びて、人の背よりも高くからみついた畠の中には、嫩く生つたのを摘む鋏の音が聞えた。粗末ながらも自分で作つ

た新鮮な野菜が私の食卓に上るやうになつた。それから、私は周圍にある耕地を見て廻り、本當の百姓の手で好く整理された畠の間などを歩き廻る度に、耕作の苦心といふものが痛切に自分の身に感じられるやうになつた。私はあの耕地を通つて、非常に嚴肅な念に打たれたことを今でも能く思ひ出すことが出来る。われ／＼が文章の手本とすべきものが何程われ／＼の周圍にあつても、それを悟らないうことには、仕方がない。それを悟らうとするには、どうしても先づ自分で試みなければならぬ。「試みる」といふことは、「悟る」といふことの初めだ。

新片町

東京市淺草區

淺草橋

東京市日本橋區と淺草區との境にあり、神田川の下流に架せらる。



傳馬

淺草の新片町に住んだ頃、家が淺草橋や兩國橋に近いので、私はあの隅田川の界隈を漕ぎ廻つたことがある。最初の中は無暗と手足を動かさず、あの長さ一丈ばかりもある艀を前へ押し手許に引きして、骨折つて見た。それでも舟は思ふやうに進まなかつた。が、次第に手足を動かすことが少くて、からだ全體の力でゆつくりと艀を押すことが出来るやうになつた。向うから大きな傳馬がやつて來たぞ、あいつに一つ衝突しないやうに、さう思つて漕いで行く樂みなども、それから起つて來た。其の後、船頭のする所を見ると、實にゆつくりしたものだ。そこには、力の省略がある。簡素の美がある。文章の道にも、無暗と筆を弄することが

鬼作左

本多重次。通稱作左衛門。世に鬼作左といふ。徳川家康の名臣。

新井白石

名は君美。徳川時代の儒。政治家。享保十年(元禄)歿。年六十九。

天正十三年

正親町天皇の御代

徳川殿

徳川家康。時に年四十四。

決して自己の眞の「表白」とはならない。

眞に好い文章には、眞に好い「結晶」の力がある。(飯倉だより)

一九 鬼作左の嬉し泣き

新井白石

天正十三年、徳川殿御背中に疔といふもの出来て既に危く見えさせ給ひしかば、内外の「醫療術」を盡くしけれどもその「驗」なく、唯弱りに弱らせ給ひ、自らもこれまでと「思召」しけるにや、宗徒の御家人等召集めて、御跡の事ども仰せ置かる。人々の「周章」いふに及ばず、土民百姓等に至るまで、その程々に従ひて祈らぬ神佛もなく、立てぬ願もなし。
重次御枕に取りつき泣く／＼申しけるは、殿も定めて

覚えさせ給ひなん、重次が昔此の病を受けしに、たちどころに「驗」を得し良醫の候。彼を召して見せ試み給ふべし。」と申す。「諸醫既に手を束ね、家康亦死を決す。この上「醫療其の證」なし。且は命を惜しむに似たり。」とて用ひ給はず。
重次大いに怒つて、斯程大事の「腫物」軽々しく思召し侮つて、事急なるに臨めばこそ諸醫も術盡きぬれ。それに又、良醫して治し参らせんとするを用ひ給はず、亡せたまはんと、御心がらとは言ひながら、あつたらしき命かな。諸醫、術盡きぬと申す上は、彼いかでか治し参らすべき。年老いたる重次が御跡にさがつての御供叶ふべからず。さらば御先へ参らん。」とて、御前を「罷り立つ」。

徳川殿大いに驚かせ給ひ、あれ止めよ。」と仰せければ、近く侍ふ人々走り出て引留め、仰せらるべき旨あらせられ候。」といふ。重次大いに聲を怒らして、最後の暇乞うて罷り申す者を見苦しい殿はらの止めやうや。」と罵つて出でんとす。「されば候。その人を止めよとの御使が、えこそ止めねと申せとは、おとなしくも候はぬ本多殿。」といはれて、げにさも候。」とて御前にまゐる。

徳川殿、汝は物に狂ひてかくはいふか、家康いまだ死し果てぬに。縦ひ家康が命終るとも、汝等が世に在らんを頼にこそ死すべけれ。又汝等も如何にもして、一日も世に残りて、若き者ども掟して、我が家の絶えざらんやうを計らんと

は思はずして、詮なき死の供せんとする事やある。」と仰せければ、「いや、それは人によりての事に候。重次も今少し年だに若く候はんには、仰までも候はず、犬死せん人の御供



本多重次

その詮なし。重次若年の昔より此處彼處の軍に従ひて、眼射られ、指落され、足切られて、負はぬ手も候はず。人のかたはといふ程のかたは、重次が身一つに餘つて、

世に交らんこと叶ふべき身ならず。殿の御情深ければこそ、當家にては人に畏れられも敬はれもしつれ。殿の亡くならせたまひなば、他人までも候まじ、まづ御壻の北條殿、我

御壻
家康の女壻。小田
原城主北條氏直。

が國々を取らんとし給はんに、若き人々が行末久しう仕へんと頼みきつたる主に忽ち別れて氣後れし、はかしくしき矢の一筋を射出すこと叶ふべからず。當家滅されんこと、亦踵を回らすべからず。重次それまで存へて、「あの年よつたるかたはものは徳川殿の譜代にて、何がしといはれし家人なるが、いかに惜しき命なれば、かく世に恥をさらすらん。」と後指さ、れん事、老の恥、何事かこれに過ぎ候べき。此の頃までも武田の家の人々御當家へ召されて、さらぬ人にも手を下げ腰を屈めしを世にもあはれに思ひしが、今は此の老人めが身の上になつて候と存ずれば、殿に後れ參らせんが悲しきばかりにも候はず、我が身の果もあさましきによ

武田
武田勝頼。天正十年(三國)織田徳川の兩軍に攻められた。天目山で自殺した。年三十七。

つて、御先に死することにて候。と申す。

「汝が言ふところ、ことわり至極せり。さらば醫療のことは汝が心に任すべし。天命すでに到りて、家康空しくならんとも、汝も亦家康が心に任せ、いかなる恥を見つべくとも、一日も生殘つて、後の事よきにはからふべしと存ずるや否や。」と仰せければ、重次が申す旨に任せられんには、重次いかでまた仰をや背くべき。と申す。「さらば醫師召させよ。」とて召さる。

醫師やがて參つて、御灸治宜しかるべし。と申せば、重次艾取つて据う。御灸の痛み覚えさせ給はねば、艾を増し加ふること多くして後聊か痛ませ給ふ由仰せければ、御薬をつ

けて參らせ、御藥湯をも進め奉りしに、その夜の半ばに、御腫物潰れて膿水血夥しう流れ出で、御惱たちどころに輕ませたまへば、重次は嬉し泣きに聲を限りに泣く。御前伺候の人々も感涙を共に流しけり。

(藩翰譜)

二〇 地獄極樂壁一重

西村眞琴

西村眞琴
理學博士

何々地獄と近頃地獄といふ文字が餘りに目立つて來た。それが今の世相を如實に物語るものだとして解釋してゐる人が多い。果してこの世はそんなに地獄か、いはゆる諸行無常の風が吹きすさむだらうか、新聞の社會面を賑はす記事の數々が、今生の地獄に直接關係をもつてゐるとすれば、私

は勇敢にペンを執つて地獄退治の一論を投げねばならぬ。

地獄の入口に掲げられた額には「競争」の二字が目立つ。元來競争は生存をより健全に保證する爲の自然の法則である。換言すれば生物に對する徹底した愛である。人類が他の生物から頭角をあらはしたのも、人間文化が進展したのも悉くこれ。「でも敗けた者は悲しいぢやないか……」地獄の門内からこんな聲が起つて來る。ところが自然は決してこの聲を頭からは肯定はしてゐない。見よ世は單調ではないことを。頗る複雑で、且多面的である。それはあらゆる生命の存在に大手をひろげてはくくむ證據だ。

一陽來復の野にそろ／＼萌え出す草木の芽は、何れも寒
 冷の季節を経てゐる。その多くの種類は、その生立つ状に
 おいても不同である。多様と不同の中におの／＼個性を
 發揮してゐる。

福壽草と芍薬とを比べて何れが勝つた負けたではない。
 兩方の存在をゆるすためには、同一の條件だけで律してゐ
 ない自然の愛を學べとすゝむる次第だ。一方でおさへる
 ことは、一方でゆるめるための自然の大攝理に外ならない
 のだ。決して一人や一群の天下でない。多面で多様であ
 る自然の態は、多くの人々のもつ特性に對して、泣かずに元
 氣よく來れ」とさしまねいてゐる。

もへらもち



やすで



土の中をもぐつて生きる「もぐらもち」があるかと思ふと、
 その上の石の下で圓くねころんでゐる「やすで」がある。又
 その石にへばりついて生きてゐる苔がある。その苔のそ
 ばでぶらついてゐる六本脚の小さい奴があるかと思ふと、
 地上は諸君に譲るとばかり、揚々として空をとぶ鳥の歌が
 耳に入る。眼に入るもの耳に聞ゆるもの、どれもこれもそ
 れぞれの特徴をもつて愉快に生きてゐるものばかりだ。
 土が適所でなければ水、水が不適とならば空、と與へられ
 たる世界はあらゆる生命に適所を供へて待つてゐる。風
 が吹く、風にたのんで散布する種子がある。雨が降る、雨で
 生長する芽がある。照れば照るでよし、降れば降るで又よ

した。
 生きる道はいくらでもある。せまく考へて自らを萎縮
 せしめるな。一度外れても悲しむな。弓を持つて的にむ
 かふ時のやうに、自分の力だめしだと思つて、樂しく競争の
 場裡（その内）に立て。外れたら又やるだけだ。「天は汝を無意義に
 この世に生存せしめてゐない。」どんな草にも一花は咲く、
 咲かいでおかうと思つても、咲かすめずにおかぬ春風が吹
 いて来る。
 「極樂は地獄の隣壁一重。」心配せず、元氣よく、七轉八起の
 人生劇に自分の割りつけられた役目を樂しく演じるつも
 りで立て、さあ立て。（天地のはらわた）

二一 故郷

正岡子規

正岡子規
 名は常規。松山市
 の人。俳人。明治
 三十五年（五六）歿、
 年三十六。

世に故郷ほどこひしきはあらず。花にも月にも、喜びに
 も悲しみに、まづ思ひ出でらるゝは故郷なり。故郷は學
 問を究め見聞を廣くするの地にあらず。されど故郷には
 歸りたし。故郷は事業を起し富貴を得るの地にあらず。
 されど故郷には住みたし。兩親兄弟あるが爲に、故郷に歸
 りたしと思ふもあらん。我は親はらから、ともに今は故郷
 にあらねど、なほ故郷こそこひしけれ。都（みやこ）にありて世を厭
 ふが爲に、故郷に住みたしと思ふもあらん。我はさまで世
 を厭ふふしもなきに、なほ故郷こそこひしけれ。思へば十

故郷
愛媛縣松山市・城
は松山城

餘年の昔は、やり氣の抑へ難くて、單身故郷を出て行かんとこそは勇みしが、いざ首途といふに、一滴の熱淚の覺えず頬のあたりに流れ來るを見送りの人に見せじと、顔そむけたる苦しさ、何やら胸につかへたる心地なりき。母親の乳房と故郷の土とは、離れ憂きものなりけり。

故郷近くなれば、城の天主こそ先づ目を喜ばす種なれ。低き家狭き町、淋しき松並木、丈高き稻の穂、鼻の先に並びたる山々、幼き頃より見馴れたる一軒家、見るもの皆莞爾として我を迎ふるが如く、何れ懐かしからぬはなし。先づ身寄の家々をこゝかしこと訪れて、久濶の情を述べれば、年老いたる婆々様、瘦せたる叔父御、肥えたる叔母御、よく居睡りす

る女中の顔さへ、見覺えたるまゝに少しも變らず。さて變らぬは故郷よと思ふも、歸り著きし瞬間にあり。變らぬはめでたけれど、全く變らずは何の面白きことかあらん。變らずと見る中に、いさゝかなながら彼も此も變り

筆蹟
ゆふやけて日和に
なりぬ秋の雲
子規

ゆふやけて日和に
なりぬ秋の雲
子規

筆 規子 岡正

行きたるこそ、なかに聞きて見てゆかしけれ。人の上につきて第一に變りたるは、わが従弟妹の數のふえたと、其の人と成りたることなり。都の人こそ來たまへれ、われも其の顔見ん。などひしめきあひ、わが前に跪きて禮を述べ

るもあれば、襖の隙よりはづかしげに、鏡ふもあり。幼き兒のはじめて見たる顔もあり。さあらぬも幼顔のおもかけをおぼろげにとめて振分髪の子まげに變りたるも少からず。かつて見し時には、小學讀本を高らかに讀みあげて、誇りが人に聞かせたる男の子の、今ははや時事を談じ、外國の事情を説くほどになりたるもあり。唐黍の穀にてこしらへたる雛を箱の上に並べて、人形遊びに餘念なかりし女の子の、年は嫁ぐべくなりて、わが膝元に茶を汲みて置きながら、顔も得あげて退きたるなど、思へば彼方よりは、我をもしかく年とりたりと見るらんと、獨り心に恥づること多かり。

戸の外に出づれば、標札せしいかめしき家どもは、おほかた聞き知らぬ人の名を示せり。幼き時よりなじみになりし本屋は、昔の様子ながら、見なれぬ丁稚は我を十年前の華客とも知らで、よそ／＼しくもてなしたるも本意なく覺ゆ。かねて知りたる道具屋はあらぬ店となりて、淋しかりし武家町の角に、にぎ／＼しく商店の軒を並べたるもあひなしや。

いで菩提所に詣でて、久しぶりに香をも手向けんと辿り行けば、山門半ば崩れて、一條の汽車道は其の傍を横ざれり。驚きて少し左に曲れば、數百の墓壘々としてまだ荒れはてしにはあらねど、かの鐵路にへだてられて寺の境内をはな

菩提所
松山市正宗寺。

れたれば、父君・祖母君などの墓のうしろは、一步ならぬに粟・黍など秀でたり。一目見るよりも覺えず目をしばたゝきぬ。

栗の穂のこゝを叩くなこの墓をうらみながら、あまへのまを
嬉しきも故郷なり。悲しきも故郷なり。悲しきにつけても嬉しきは故郷なり。（子規全集）

二三 歸省

尾崎喜八

停車場を出て

土産の買物の包を小脇に

無味殺風景な白茶けた道を

尾崎喜八
東京市の人。詩人。

足ばやに汗になつて

とう／＼此の丘の上に立つ

あゝ緩かにうねる並木路のはづれ

高く青々と

海角に寄せては碎ける大波のやうな

一塊りの森の頭

あれこそ私の住む村だ

何といふ美しい村だらう

何といふ木立に恵まれた村だらう

七月の夕暮の天空は
薄紫の晶玉の清らかさで
朱鷺の抜け毛のやうな細い雲が
すら／＼と
軽い模様を描いてゐる

私が其處の家に着く頃には
水の垂れさうなあの空へ
宵の明星がたつた一つ
びかりと
金の印璽を捺すのだ

さうすると
村中が柔い深々とした蔭に満たされ
待宵草と小川とだけが闇に浮き
家や庭などは
咲亂れた星の花の下で
たゞ地上の小さな燈火の
光ばかりになつて了ふだらう
其處へ歸つて
水を汲みあげ

汗をさらりと流し去つて
さてこの包を解くのだ

あゝそのわが村わが家が
向うに見える

二三 ナポレオンの一面 鶴見祐輔

ナポレオンは精力絶倫の勉強家であつた。
彼の全盛期であつた第一統領のときに、彼に日夜隨いて
ゐたレーデルルの手記に曰く、
「彼の一番の特色は彼の注意力の旺盛と持續とである。」

鶴見祐輔
群馬縣の人。思想家。

ナポレオン
佛國皇帝ナポレオン第一世。(西曆一七六九—一八二一)

彼は一息に十八時間働きつゝけることができる。それも一つ仕事のこともあり、數種の仕事のこともある。自分は一度たりとも彼の頭の疲労したのを見たことが無い。彼は肉體的に疲労してゐる時でも、激動してゐるときでも、嚇怒してゐる時ですらも、その精神に弾力を失つたのを見たことがない。どんな大事件が起つてきても、今しかけてゐる仕事から氣を奪はれたためしがない。と。彼と一緒に仕事をした年若い秘書達は、皆疲労困憊してしまつた。彼は夜遅く秘書を呼出して、朝の四時まで仕事を一緒にして、翌朝七時には又呼びにやつた。それはセントヘレナで愈、死ぬ時まで變らなかつた。

セントヘレナ
南大西洋中の一孤島。イギリスに屬する。

二三 ナポレオンの一面 大ナポレオンの一面

彼はよく言つた。

「俺はいつでも働いて居るのだ。俺はうんと考へるのだ。



家のナレヘトンセ
(るよにレオレボナ)

俺が何事が起つても困らずにすぐ善處するの、偶然ではないのだ。俺はどんな小さい仕事をする時でも、永い間考へて考へて考へ抜いた後でするんだ。俺の耳に咄嗟によい智慧を私語してくれる守神様なんか居ないんだ。俺は食事をしてゐるときでも、芝居を見てゐるときでも、間斷なく色々な事を心の中で、あちらから、こちらから、考へて練りに練つてゐるのだ。夜中でも俺は飛起

きて仕事をするのだ。」

この考を練りに練る習慣が、彼の思想を非常に精確にした。彼は中途半に投げやりに物を考へない。さうしてどの考へも、數字で考へてゐた。タレーランに言ひつけて、奥太利大使に話して、などといふやうな、ぼんやりした考へ方ではなかつた。あしたの朝十時十五分、タレーランを第三號應接間に呼んで、十五分間話して、奥太利大使にその日の午後二時に話さして、その會話はすぐ五通の記録に作つて、一通づつ普英、露西、伊の大公使館に送つて、と一つ／＼數字で考へてゐた。それは彼の數學癖の賜物であつたと彼は言つてゐた。

さうしてその考へは、素晴らしい速力で彼の頭の中で廻轉してゐた。彼は短い人生中に世界を統一しようといふのであるから、大速力で働かなければならぬことを知つてゐた。

さうして彼は、その絶倫の記憶力で以て悉くこれを覚えてゐた。

彼はいくつの仕事を一度にしても、頭の中で少しも混亂しなかつた。彼がナポレオン法典編纂の會議をしてゐるとき、彼の埃及に残してきた軍隊の形勢が頗る危険であつた。しかし彼はそれが爲に、法律の逐條審議の頭の中へは埃及のことは少しも入れなかつた。しかし又埃及のこと

ナポレオン法典
ナポレオン一世が
一八〇三年委員を
設けて編纂に着手
し翌年大成した法
典。總計二二八一
條、現時歐洲諸國
の成文法の基礎を
なすもの。

を命令し出すと、法典のことは少しも頭の中に邪魔にならなかつた。一つの仕事から他の仕事へ頭腦が大速力で移つていつた。

「俺は頭の中に澤山の抽出しがあつて、一つの仕事を初めると、他の抽出しはちやんと閉めてしまふのだ。それがすむと、その抽出しはしめて、すぐ又他の抽出しを開けるのだ。だから抽出し同志がまざることには決してないのだ。さうして眠る時は抽出しをみな閉めて寝る。」

さう言つて説明した。だからドレスデンから敗軍して逃げる時でも、各國使臣に公文書を出すやら、巴里へ募兵の命令を下すやらする暇に、あの長い手紙を妹のポーリーン

ドレスデン
ザクセンの首都。
エルベ河に臨み風
色に富む。

に書いたりする餘裕が出てくるのだ。
それで彼の有名な言葉がある。
「天才とは勉強といふことだ。」



拿破侖の正装式冠戴
(ナポレオンによつて)

と。それが彼の一生であつたのだ。
彼が戴冠式の紋章に蜜蜂を選んだのも、間斷なき努力を象徴したので、それが彼の身上であつた。彼が百戦百勝したのは偶然ではなかつた。彼は永い間かゝつて、百方から一つの戦争を研究し、ことにすべての起り得る最悪の場合を想像して、これに對應する準備をした。

それから開戦したのであるから、彼は多く戦ふ前に勝つてゐたのである。

天才の傳記を讀んで、誰人も一様に感ずることは、天才は悉く非凡な勉強家であつたといふことである。その苦心努力の方面は外界に傳はらないで、成功した結果のみが眼につくから、如何にも天稟の才能だけで成功してゐるやうに見えるが、本當のその各人の生活記録を詳細に調べて見ると、例外なく皆勉強家である。しかも氣まぐれの努力でなくして、生れ落ちてから死ぬまで常住不斷に努力してゐるのである。

彼は強烈な天才の自覺を持つてゐた。
 丁度宗教の開祖が神を信するやうに、自分の天才とその
 天才の使命とを確信してゐた。それは我々の説明の範圍
 を脱する一つの神秘性である。彼の精力と、彼の勤勉と、彼
 の智謀とは説明ができる。了解ができる。しかし彼の天
 才の自覺は、彼自身の悟道であつて我々外間の窺知を許さ
 ない。

チャタム伯
 イギリスの大政治
 家、雄辯家。(西曆
 一七六〇—一七七九)
 マコーレー
 イギリスの評論
 家、歴史家。(西曆
 一八〇一—一八五九)

當時の社會を射貫いてゐるのだ。

であるから彼の一生を通じて、センチメンタルになつた
 り、後悔したり、愚痴をこぼしたりした形跡がない。彼は自
 分の宿命を信じて突進していつた。彼の超凡な勇氣も、こ
 の天才の自覺から湧いてゐるやうであつた。

ゆるに彼は十九世紀のやうな人智の進んだ社會には期
 待できないやうな不思議を屢演じた。伊太利遠征にして
 も、エルバ脱出後巴里への進軍にしても、若しこれが人智の
 進まない二千年前に起つたなら、當時の社會の人々は神業
 として嘆賞したに違ひない。

ゲーテとの會見は、二大天才の邂逅で、雲間双龍兩會する

センチメンタル
 感傷的。

エルバ
 地中海中の一島、
 伊太利領。ナポレ
 オン一世配謫の
 地。

ゲーテ
 獨逸の詩人、戯曲
 家。(西曆一七四九—一八
 三二)

ホーマー
希臘の叙事詩人。
西紀前八五〇年頃
の人。

の壯觀だ。
彼の埃及遠征記のごときは、ホーマー古詩の佛がある。
それは神話時代の傳説の味だ。
麟麟生るゝこと遅し二千
年の憾が深い。

世界の統一を思つて破れ、歐洲聯邦を思つて破れ、最後に
熱帶瘴癘の地を選んで、窮死してゆくところに、彼の不思議
な一生の物語がある。

一切は彼の超凡な想像力の賜物だ。直觀力の所産だ。
それは西洋的理智を脱した、東洋的神祕性の片鱗だ。
現實主義者であつた彼と全然不同するこの奔放自在な
想像力、直觀力が、彼の一生を一個の歌詩のやうなものとな

したのだ。

この不思議なる海の兒は、小さい地球から脱出して、大き
い宇宙の中に、五彩燦たる虹の王國を築いて住みたかつた
のだ。偶誤つて雲の棧道を下り落ちてきた星の子であつ
たのかも知れない。

そこに彼が、永久に人類の空想を唆つて已まない魅力が
あるのだ。

いま我等は、このナポレオンの一生を通覽し終り、煩瑣な
人間社會の約束に疲れた眼を擧げて、彼に呼びかける。

地中海の波の子、ナポレオン
お前の地上一切の功罪よりも、

お前の頭の中に吹き荒れてゐた
 その廣大無邊の想像力に向つて、
 我等は、
 同じ人間としての同情を投げつける。
 星の子。 風の子。 虹の子。
 さらば。

(ナボレオン)

二四 詩的農園

菊池 幽芳

札幌に於て最も詩趣に富める地を求むれば、蓋し札幌農園か。札幌農園は北海道帝國大學に附屬せるものにして、實に我が邦の模範農園たり。農園としての設備完全に近

菊池幽芳
 名は清。茨城縣の
 人。小説家。

北の農園
 農園の
 リエツ状態
 と之を
 との

目的

きのみならず、地は即ち石狩平野の一部なるが故に、到底内地に於て求むべくもあらぬ廣大なる地域を領し、凡百の施設整頓して、些の遺憾を感ずるなく、經營の手腕は縦横に發揮せられて餘蘊なきに近し。然れども余はこゝに農園の設備を説かんとするものにあらず。余の記さんとするところは、たゞその風致にあり、農園の粹たる廣き牧場の風致にあり。

西北の二面全く開け、平野遠く連りて、西は遙かに札幌の障屏をなせる連山の紫翠に接し、北は石狩原野を指して、その際涯を知らず。萋々たる牧草氈の如き處、こゝにはかの林中の雜樹の互に相凌ぎ相排するが如きことなく、廣き空

美観と
牧場
と
楡の外



札幌農園の牧場

それ **廣漠**たる平野の緑は既に人の心を壯快ならしむ。

間を占めて處まばらに立てる楡ありて、晝は残る限なく日の光を浴び、夜は思ふがまゝに星の雫を受く。何に遮らるゝものなきその根は、太古のまゝなる土壤より潤澤なる養分を吸取りて、鬱蒼たるその枝葉は以て百歩の地を蔽ひ、亭亭たるその幹は以て百尺の空を摩す。一たび足をこの農園の牧場に入ると、もの、誰か遺憾なく發揮せられたるこの楡の美に驚嘆せざらん。

これに喬木の亭々たるを配する時、更に一段の風致を添へ来るを覺ゆるなり。たゞその喬木の種類によつては、またその風致に多少の増減なき能はず。思ふにかゝる平野を飾るに適せる樹木は、松にあらず、杉にあらず、實にその高さとともに深さを有し、深さとともにまたその幅を有するもの、分明にいへば、その枝葉十重二十重に密生し、鬱然として晝なほ暗き樹陰を作る喬木たらざるべからず。

請ふ、かくの如き喬木の森々として青緑の平野に立てる様を想像せよ。何ぞその畫の如くにしてまた詩の如くなるや。人もし十分にかゝる想像を回らすことを得たりとせば、その人は即ち遺憾なく札幌農園をその腦裡に描き得

たるなり。

農園が楡によつてその風趣を加ふることかくの如し。然れども是なほ靜態しやんたいに於ける風趣のみ。更にこの間に牛



農園の楡

を點じ馬を點じ羊を點ずるに至つて、農園の眞風趣は始めて動態どうたいとなりて活躍す。

丈高く、四肢長く、體軀驚くべきほど巨大にして、黑白の斑を有するホルスタイン種の牛が、その大樹の下に、一は横たはり、一は立てる、或は長方形の體軀をなせる赤色の短角牛、眼柔しく四肢短きエイアシャー種の牛などが、此處に彼處に草を

ホルスタイン
オランダ種の乳用牛。
短角牛
英國原産の肉用牛。
エイアシャー
英國原産の乳用牛。

メリノ
毛用種の中で最も優れた羊。

楡の美し
羊の美

食へる、或はさまよへる、或は尾を振れる、更に麗しき毛を被れるメリノ種の羊が、その角の大にして曲れるには似ず、いと優しき眼光もて馴々しく近づき來るを見ずや。もしこの世に樂園といふものありとせば、その關門は實にかくの如き處なるべし。その繪畫的なる、その詩的なる、また附近の建物と相待つてその大陸的なる、少くともこゝに來るものは、内地の光景と甚だしく相隔れるを感ずるならん。札幌農園は實にかくの如き特色を有す。余はかくの如き農園を自然の師として學べる學生の幸福を祝し、またこの學校より往々文章の士を出せることの決して偶然にあらずるを知れり。(日本海周遊記)

文章の士
新渡戸稻造・志賀重昂・内村鑑三等。

諭吉
 姓は福澤。大分縣中津の人。思想家。慶應義塾の創立者。明治三十四年(三六)歿。年六十八。
 太田正孝
 静岡縣の人。經濟學博士。衆議院議員。

三田
 東京市芝區。

二五 町人諭吉

太田 正孝

私は、彼みづから口にしたといふ「町人諭吉」といふ言葉を、大膽にも標題としてかゝげてゐる。三田の聖人ともいはれる人を、かりそめに「町人」と呼んだのではない。それは、彼の最も喜ぶ全人格を表現したものであるからである。彼は、どこまでも市井の一野人として、いみじくも生を楽しんでゐたからである。

「町人」といふ語は、とかくいやしい言葉であるやうにひく。それは、徳川末期の町人たちの無智と墮落とから出て

ゐる。いはゆる「素町人」である。いやしい、軽い、さげすまれる。もつとも、一口に町人とはいふものの中には心の清い、ゆたかな男もある。男を賣らうとする「町奴」がそれ。自由

で、とらはれない。邪氣がない。広い心持が宿つてゐる人たちである。

彼等には、人爵などをそつちのけにした、原始のまゝの



福澤諭吉

大自然のうちに生まれついた心境がある。殿様も、武士もこはくない。加賀様の前に呼出された俳人一茶は、うぐひすや御前へ出て同じ聲と、あつさりやつてのけてゐる。

加賀様
 前田侯。
 一茶
 小林彌太郎。信濃柏原の人。俳人。文政十年(四七)歿。年六十五。

それが、本當の野人の心境である。正しい町人の心根である。諭吉は、その心をもつて押し進まなければ新日本を建設することは出来ないと思つてゐる。町人とは、おれのやうな人間である。おれのやうな人間にして、はじめて「町人」と名のり得る。彼は身をもつて、それを示さうとしたのである。

町人とは、人間らしい人間といふことである。社會人のことである。官位爵祿階位官祿で飾り立てられたものではない。金錢的名譽で彩られたものではないのである。

二

維新當時の書生は元氣なものであつた。脛は丸出し、毛

むくじやらの腕を張る。大道を大またに歩く。天下無敵が看板。無作法が豪傑の身嗜みと心得る。そして、彼らは偉人をあこがれてゐる。三田の慶應義塾の名が耳に入る。諭吉を慕つて、田舎を飛び出して来る。あつばれ書生の面目を諭吉にほめられようと、小倉袴に、肩いからして、塾に向する。しかし勝手がまるでちがつてゐるのにおどろく。塾生は、袴などはいてゐない。縞の着物に角帯、ぞろりと着流してゐる。ひげものばさぬ。髪も刈つてゐる。まことにさつぱりしてゐる。豪傑書生は、自分をかへり見る。小倉袴に兵兒帶まがき、それも皺くちやである。髪はのびてゐる。爪には垢が溜つてゐる。

塾にはいる。いかにもよく掃除されてゐる。器物も、ちやんと整へおかれてある。綺麗で、氣持がいゝ。さうするには、毎日掃除をしなければならぬ。塾生は總がかりで掃除する。さらに、一週間に一度は大掃除をする。塾生は、机、夜具、ランプ、炭取など、ありつたけの財産を外に運び出す。室の中をがらんとさせる。はたく、掃く、雑巾をかける。それを諭吉が見まはる。着流して、尻を端折つて、ひやめし草履をはいてゐる。これを見た漢學塾育ちの豪傑書生は面喰ふ。大丈夫當に天下國家を掃除すべし。何ぞ方丈の小室をや。と思つてゐる。あつけにとられる。しかも、今の世に名を出してゐる彼のお弟子の政治家や實業家が、みんな

この業を積んだのだから、うれしい。

諭吉は、常に塾生に身だしなみを説く。禮儀作法を重んずる。言語動作をつゝしむ。「人の心は同じではないから、自分の思ふことを丸出しに言つて少しも遠慮しなかつたら、すぐに喧嘩になる。人とつきあふには物言ひに氣をつけ、失禮のふるまひなどあつてはならぬ」と教へる。町人は自由人である。自由人には、身だしなみが大切である。自由人は禮を知り、序を知り、分別がなければならぬ。

さらに諭吉は、語を強めていふ。「いやしくも立身出世の心あるものは、その心術を元祿武士にして、その働を小役人素町人にしなければならぬ」と。これこそ今の世の人にも、

鴻池
大阪の豪商

くりかへして讀んでもらひたい文句である。

三

今は昔のことである。大阪の鴻池の門前を、毎日のやうに、「はうろくや、く」と呼んで行く男があつた。番頭さんは、このほうろくやが、いかにも勤勉で、且熱心なのに感心する。ある日、呼びとめる。「はうろくやさん、お前もいつまでもさういふ商賣をやつてゐても仕方があるまい。わしが御主人に話してあげるから、どうだ、この家に御奉公する氣はないか。」といふ。はうろくやは、番頭さんの親切な言葉を喜んだ。が、まことに有り難う存じます。いづれわたしも落ちぶれましたら、他人様の御厄介になりませう。」と、あつさりといふ。

ことわつてしまふ。「いづれ、わたしも落ちぶれましたら」といふところに、このはうろくやの根性が出てゐる。本當の町人としての意氣が見えてうれしい。

諭吉は言ふ、「いやしくも、わが身になふ仕事であつたら、進取一方と決斷して、左右を顧みないことである。しかもその中にたゞ一つ大切なことは、如何なる職業をとるにしても、獨立の大義を忘れることなく、君子の風を存して、大切な場合に臨んで、節を屈しないことにある。」と。獨立自尊の大義は、この精神から生れて來る。いはゆる町人の本當の意味は、この言葉のうちに、はつきりとあらはれてゐる。諭吉のモットーとする獨立自尊といふ言葉は、彼の一生

モットー
標語。

をとほしてゐる魂の聲である。この意味において、獨立自尊すなはち町人精神といふことになる。

諭吉は、學生に獨立自尊の義を、かう説いてゐる。「獨立自尊の一義は、君等が讀書中にもこれを解し、先輩の言を聞いてもこれを悟り、又塾中の空氣を呼吸して、自然に心に得るものであらう。これは、學生として勉強してゐる間にも、日夜實行すべきことであつて、必ずしも後日になつて實行すべきものではない。獨立自尊とは、他人の厄介にならず、又他人に依頼することなくして一身を處し、わが思ふまゝにこの世を渡るといふ意味である。だから塾にあつて勉強して居る間でも、その言行は、すべて自分でその善し惡しを

考へて人に交はり、わが心に思はぬことがあつたならば、如何に他人に誘導勸告せられても、これに雷同してはならぬ。何でも自分の本心に背かないやうにすべきである。」と。かうしてみると、本心にそむかなかつたほうろくやは、獨立自尊の實行者である。

彼にして、もし鴻池の番頭になつたら、生活の安きを得たであらう。が、それは、とりもなほさず、人間としては、落ちぶれたことになる。本心にそむかないところに、町人としての面目がある。もとより町人にも、器の大小がある。力の大小もある。諭吉は、その偉大なる町人のタイプである。

(町人諭吉)

タイプ
典型。

二六 獨立

福澤論吉

獨立とは先づ他人の厄介たるを免かれ、一切萬事自分の身に引受けて、自分の力に衣食し、親子の間にても其の分界を明かにして、然る後に我が思ふ所を言ひ、我が思ふ所を行ふの義にして、其の基礎既に立つ上は、苟も本心に恥づる所を犯して、他に屈することを爲す可からず。大事に臨んで節を枉げざるは無論、一言一行の微に至るまでも、自分の氣に濟まぬことを等閑に附するは、獨立の旨に非ざるが故に、他に對して遠慮會釋はある可からず。世の中の人情に連れて餘儀なく云々、一時の方便の爲に止むを得ず云々とて、

右す可きを左し、東す可きを西するが如きは、獨立の眞面目に非ずして君子の愧づる所なり。

獨立の眞面目

福澤論吉筆蹟

斯く云へば、人間の行路は至極窮屈にして、色も艶もなく、到底打解けて人に交ることは叶ふまじと思はるゝやうなれども、實際は決して然らず。抑爰に云ふ獨立とは、之を外面に装うて身の飾に用ふるものに非ず。唯、深く心の底に藏めて自ら守るまでの主義にして、其の心の寛大なるは、大海の物を容るゝに異ならず。されば、人に向つて多きを求めず、人は人たり、我は我た

柳下惠
支那周代の人、名は展禽、一名は獲、字は季、恵は諡。
伯夷・叔齊
殷末の志士で兄弟。周の武王が殷を討たうとするのを諫めて容れられず、周の粟を食ふを恥ぢて首陽山に餓死した。

り、苟も人の來りて直ちに我が獨立を妨げ、また之を妨げんことを試みるに非ざれば、悠悠として交ること甚だ易し。或は此の旨を評すれば、人に接するの法を柳下惠にして、自ら守るの心を伯夷叔齊にすと云ふも可なり。一片の獨立は生命より重し。之を妨げんとする者あらば、滿天下の人も敵に取る可し、親友の交も絶つ可し、骨肉の情も去る可し。斷じて躊躇せざる所なれども、さて實際に於ては決して斯る劇しき場合はなきものなり。

譬へば封建の時代に武士が雙刀を帶したるは、天下の人を敵にして、無禮者はたれかれの容赦なく切つて棄てんと
の覺悟なりしかども、苟も仁義を重んじて武士道を守る限りは、柄に手を掛くるの必要なくして、何十萬の武士が何百年の日月を無事に經過したるが如し。當時の天下に鄙劣なる者も多く、臆病なる者も多しと雖も、其の者が武士に向つて無禮せざる間は、之を許し、相互に往來して、曾て自由の交際を妨げず。唯、眞實の武士は自ら武士として、獨り自ら武士道を守るのみ。故に今の獨立の士人も、其の獨立の法を昔年の武士の如くにして大なる過なかる可し。

(福翁百話)

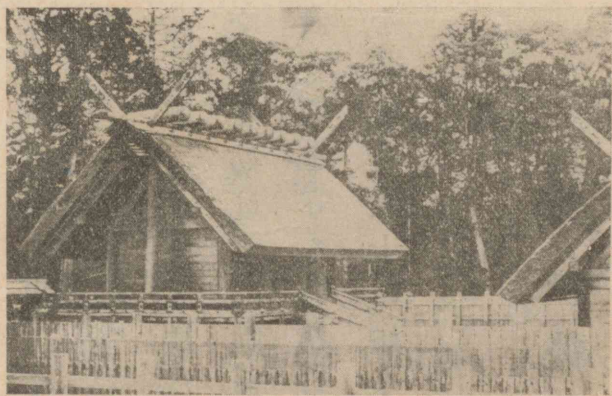
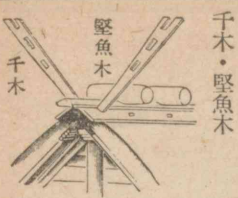
二七 伊勢參宮

五十嵐 力

俄に參宮を思ひ立ち、昨日の夕八時に東京を發つて、今朝

五十嵐力
米澤市の人。國文學者。早稻田大學教授、文學博士。

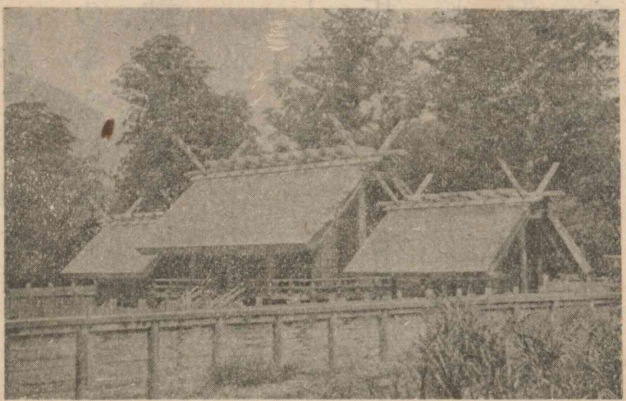
山田 三重縣宇治山田市
 外宮 舊山田にある。豊
 受大神宮。
 内宮 皇大神宮。
 五十鈴川 三重縣度會郡にあ
 り、皇大神宮の神
 城を流れてゐる川



外宮正殿

の十時に山田に着きました。まづ外宮を拜んで、次に内宮を拜みました。兩宮の神々しさ、殊に内宮の畏きは言語に盡くせません。五十鈴川の清き流に水底の小鮎の數を讀みつゝ、恭しく嗽いで、それから名も知らぬ鳥の、頭上の木の間に飛び移つては、奥深く啼く音に耳を澄ましつゝ、緑青色の苔にさびた神杉の太い幹が、天を支へる柱のやうに立ち竝んで居る間を辿つて、暫く進むと、やがて木立の奥、塀の彼方に千木・堅魚木の金色

が拜まれます。更に進んで塀の内に入ると、正面の御門に



内宮正殿

は白布の垂幕が長く地に曳いて、靜かにそよ風に揺られ、其の奥に、疎らに立つた神杉に護られて、御白石の敷きつめられた間に、神々しい白木の御宮が拜まれます。私はまづ御白幕の手前の石段の下に跪いて、小さき祈を捧げました。そして傍に竝んでゐた老爺老婆が、拍手を打つては溜息まじりに高聲の祈願を繰返すのに聞き入りながら、現の間に、西行法師が忝さに涙を

西行法師 歌人。俗名佐藤義清。鳥羽上皇に仕へ、後に僧となる。建久元年（一八五〇）寂年七十三。忝さに涙をこぼし何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさを涙こぼるゝ（西行）

笙



簞篋



宇治橋
五十鈴川にかゝる

朝熊岳

伊勢・志摩兩國の
分水界をなす山
(五三四米)、宇治
山田市の東方約八
料。頂上に金剛證
寺がある。海拔五
五〇米。

こぼして額づいた小さい敬虔な姿を思ひ浮べました。
神宮の御建築は「單純」の偉大さが極度に表現されたもの
のやうに拜されます。そして此の御社の神杉は、樹木の神
神しさを極度に現はしたもので、やうに思はれます。
私は内宮の御後なる神杉の根方を一面に蔽うた苔の美
しさに見とれつゝ、もと來た道を繰返して、御手洗川に嗽ぎ、
折しも聞ゆる笙簞篋の幽寂な雅樂の音に送られて、此の神
境を辭しました。そして顧み、宇治橋を渡つて、昭憲皇
太后の愛で聞食したといふ赤福餅に腹をこしらへ、それか
ら車を命じて田圃路の五十九町を志摩境の名山朝熊岳に
走らせました。

神路山

内宮の神境をめぐ
る嚮者とした山林

大神宮儀式帳

二卷、延暦二十三
年(一四六四)伊勢
神宮から朝廷へ奉
つた注進書で、大
中臣眞繼の記述し
たもの。

輶



伊勢の國
伊勢國の南部地方

神路山の御蔭を浴び御裳濯川の流に肥された田圃路を、
車に揺られながら、私は此の神境が大神の大御心に叶うた
故由を考へました。「大神宮儀式帳」に

度會の國は朝日の來向ふ國、夕日の來向ふ國、浪の音聞か
ぬ國、風の音聞かぬ國と、弓矢輶の音聞かぬ國と、大御心鎮
まります國と、悦びたまひて、大宮定め奉りき。

とあるのを見れば、第一には山水の景色の類ひなさを愛で
させられたのであらう、第二には地勢・氣候・風土のうるはし
さを愛でさせられたのであらう、第三には此の土地に永久
なる平和の可能性のある事をめさせられたのであらう、
最後には一切の消極的煩累にわづらはされずして、皇御孫

に率ゐらるゝ大和民族の積極的光明的の發展を見そなはずに都合のよい心の落ちつく境と思はせられたのであらうなど考へつゝ、折々車夫の饒舌に氣を轉じて居る中に、いつしか朝熊岳の麓に着きました。

朝熊岳は、天照大御神の御杖代として、神路山五十鈴川の神境を定め給うた倭姫命の御心に叶つて、しばしば訪ひ登らせられ、遂に此の山にて終らせられたといふ尊い歴史のある名山、昔から兩宮の參拜を表參宮と呼び、朝熊の登山を裏參宮と呼んで、此の山に詣でぬを片參宮と云つた程の由緒のある名山、聖徳太子、聖武天皇、弘法大師、其の他の聖達の靈跡に神さびた名山、わづか二千尺の高さながら五六千尺

倭姫命
垂仁天皇の皇女。

以上の高山の面影を具へた名山であります。

明日は早く奥院に詣で、午後は下山して二見に參り、それから鳥羽の島めぐりをして、兩三日中に歸京いたします。

(水莖)

二八 武藏野

國木田 獨歩

國木田獨歩
名は哲夫。千葉縣
の人。小説家。明治
四十一年二月八日歿、
年三十八。
武藏野
關東の大平原。南
は相模野、北は利
根川、西は秩父・
甲斐の連峰に境す
る。

武藏野に散歩する人は、道に迷ふことを苦にしてはならない。どの路でも足の向く方へ行けば、必ず其處に見るべく、聞くべく感ずべき獲物がある。武藏野の美はたゞ縦横に通ずる數千條の路を、あてもなく歩くことに由つて始めて獲られる。春夏秋冬、朝晝夕夜、月にも雪にも、風にも、霧に

秋の春にくつ雨かふる

も、霜にも雨にも時雨にもたゞ此の路をぶら／＼歩いて、思ひつき次第に、右し左すれば、隨所に吾等を満足させるものがある。これが實に武藏野第一の特色だらうと、自分はいじみ感じて居る。武藏野を除いて、日本に此の様な處が何處にあるか。北海道の原野には無論のこと、那須野にもない。其の外何處にあるか。林と野とが斯くも能く入り亂れて、生活と自然とが、此の様に密接して居る處が何處にあるか。されば、君若し一の小徑を行き、忽ち三條に分れる處に出



國木田獨歩

那須野
栃木縣にある曠野。

たならば、困るには及ばない、君の杖を立てて倒れた方へ行き給へ。或は其の路が君を小さな林に導くかも知れない。迷はず行き給へ。林の中ごろに到つて又二つに分れたら、其の小なる路を選んで見給へ。或は其の路が君を妙な處に導くかも知れない。それは林の奥の古い墓地で、苔むす墓が四つ五つ並んで、其の前に少しばかりの空地があつて、其の横の方に女郎花など咲いて居るといふやうな處だ。頭の上の梢で小鳥が鳴いて居たら君の幸福である。すぐ引返して、左の路を進んで見給へ。忽ち林が盡きて君の前に見わたしの廣い野が開ける。足もとから少しだらだら下りになり、萱が一面に生え、尾花の末が、日に光つて居る。

萱原の先が畑で、畑の先に脊のひくい林が一叢しげり、其の林の上に遠い杉の小杜が見え、地平線の上に淡々しい雲が集まつて居て、雲の色にまがひさうな連山が、其の間に少しづつ見える。十月小春（あき）の日の光が（ぼんやり）のどかに照り、小氣味よい風がそよ／＼と吹く。若し萱原の方へ下りて行くと、今まで見えた広い景色が隠れてしまつて、小さな谷の底に出るだらう。思ひがけなく細長い池が萱原と林との間に隠れて居たのを發見する。水は清く澄み、大空を横ぎる白雲の斷片を鮮かに映してゐる。水の畔には、枯蘆が少しばかり生えてゐる。此の池の畔の徑を暫く行くと、又二つに分れる。右に行けば林、左に行けば坂。君は必ず坂を上るだ



武 藏 野

らう。とかく武藏野を散歩するのに、高い處高い處と選びたくなるのは、何とかして広い眺望を得たいと求めるからで、それで、其の望は容易に達せられない。見下すやうな眺望は決して出て來ない。それは初からあきらめたがいゝ。若し君が何かの必要で道を尋ねたく思つたら、畑の中に居る農夫に聞き給へ。農夫が四十以上の人であつたら、大聲を上げて尋ねて見給へ。驚いて此方に向き、大聲で教へてく

れるだらう。若し少女であつたら、近づいて小聲で聞き給へ。若し若者であつたら帽を取つて慇懃に問ひ給へ。大様に教へてくれるだらう。怒つてはならない。これが東京近在の若者の癖であるから。

教へられた道を行くと、道がまた二つに分れる。教へてくれた道は餘りに小さくて少し變だと思つても其のまゝに行給へ。突然農家の庭先に出るだらう。なほ變だと驚いてはいかぬ。其の時農家でまた尋ねて見給へ。門を出るとすぐ往來ですよと、すげなく答へるだらう。農家の門を外に出て見ると果して見覚えのある往來だ。なるほどこれが近路だたと君はすぐ微笑をもらすに相違ない。其

の時はじめて教へてくれた道の有難さがわかるだらう。

眞直な路で兩側とも十分に黄葉した林が四五町も續く處に出る事がある。此の路を獨り靜かに歩むことのどんなに樂しからう。右側の林の頂は夕陽鮮かに輝いて居る。をり／＼落葉の音が聞えるばかり、四邊はしんとして如何にも淋しい。前にも後にも人影見えず、誰にも遇はない。若しそれが木の葉落ちつくした頃ならば、跡は落葉に埋もれて、一足毎にがさ／＼と音がする。林は奥まで見すかさず、梢の先は針の如く細く蒼空を指してゐる。猶更人に遇はない、愈淋しい。落葉を踏む自分の足音ばかり高く、偶、一羽の山鳩のあわたゞしく飛去る羽音に驚かされる。

同じ路を引きかへして歸るは、愚である。迷つたところが今の武藏野に過ぎない。まさか行き暮れて困ることもあるまい。歸りも矢張あらしに方角をきめて、別の路を當もなく歩くが妙。さうすると思はず落日の美觀を獲ることがある。日は富士の背に落ちんとして未だ全く落ちず、富士の中腹に群がる雲は黄金色に染んで、見るがうちに様々の形に變ずる。連山の頂は、白銀の鎖のやうな雪が次第に遠く北に走つて、終には暗澹たる雲のうちに没してしまふ。

日は落ちる、野には風が強く吹く、林は鳴る。武藏野は暮れんとして寒さが身に沁む。其の時は路を急ぎ給へ。願

山は暮れて
谷口燕村の句

井上通泰
姫路の人。醫學博士。元御歌所寄人。宮中顧問官。

みて思はず新月が枯林の梢の横に寒い光を放つてゐるのを見る。風が今にも梢から月を吹落しさうである。突然また野に出る。君は其の時、
山は暮れて野は黄昏の薄かな
の名句を思ひ出すだらう。(武藏野)

二九 玉の御聲

井上通泰

明治天皇が古今に比なき歌聖にましましたことは、私は今更申すまでもないことであるが、明治天皇御製の臨時編纂部委員を拜命し、親しく數多の御製を拜見する光榮を擔

うたについて、畏れ多いことながら、その編纂中に感じた事の二三を謹述しようと思ふ。御製編纂以前、新聞などで公表されたのを拜誦いたすと、殆ど皆主観的な、教訓的な御製ばかりであつたので、御製は全部かやうなものかと存じて居つた所が、編纂に従事して見ると、決してさうではない。

この朝け一村雨やふりつらむ

椼のわか葉に露のたまれる

かゝやきし入日の影も消えはてて

富士の裾野にゆふだちのふる

いけ垣のかなめの上に咲きながら

根ざしは見えぬひるがほの花

魚はみな底に沈みてもみぢ葉の

うかぶもさむし庭の池みづ

大ぞらの星の林も動くかと

思ふばかりにこがらしの吹く

たゞ暫しあけて見るまに板敷の

上までつもるけさの雪かな

山松の木のまに見ゆる枯枝や

うつくしかりし紅葉なるらむ

といふやうな詩的情操を詠み出で給うた、叙景的文學的な御製を澤山拜するに及んで、げに、天皇は歌聖にましく、けり。」と畏れながら感嘆し奉つたのである。

西京、
京都のこと。

次には、父帝^{ちひみかど}を偲び給ふ御製、西京を懐かしみ給ふ御製が多い。それは御集にも澤山出て居る。



明治天皇御尊影

天皇は歌と刀劍と馬とを御好み遊ばした故、それらに關係する御製が多く、又どういふ譯か、猿を御詠みになつたものが割合多かつたやうである。

次に御趣味の窺はれるのは、

なか／＼に色こそよけれつくろはぬ
しづが垣根のあさがほのはな

なか／＼にみやび少しあまりにも
つくりすぎたる庭のけしきは
などである。又、

うるはしき花をゑがける小瓶には
松のえだをや折りてさしてむ
といふ御製がある。是は實に高尚風雅なる御趣味の御發露と申し上げる事が出来る。成程花をゑがいた瓶に花を活けては、瓶の花も、まことの花も、共に引立たぬ事になるであらう。世には、おもしろい山水に對して建てた樓の床に、山水をゑがいた幅をかけるなど、右の趣味を解しない人が少くないことを思ふ時、如何にも天皇の御趣味の深く、審美

眼の御高さが窺はれて、御ゆかしく拜せられるのである。又、どうしてかうまでよく下情に通じさせ給ふかと思はれるほどの御製がある。例へば

暑しともいはれざりけりにえかへる

水田にたてるしづをおもへば

此の「にえかへる水田」といふ御言葉は、いかにも寫實的で、炎天の下の水田が如實に表現されてゐる。而もこの情景は、よし目のあたりに見ても、常人にはなかく言ひ現されぬ修辭である。又、

霜ふみて撞くらむ人の寒ささへ

思ひやらるゝ鐘のおとかな

これらは御想像から出たものかとも拜せられるが、而も實情實感、眞に逼るものがある。

賤の男がひとりひきゆく小車の

おも荷の上につもる雪かな

この御製などは、到底御想像のものとは思はれない。仄かに承る所によれば、時々宮城内からお濠を隔てて、參謀本部下の道路を御覽になつたといふ事であるが、恐らく左様な折に御目に留つた光景ではなからうかと拜察される。

三

明治天皇の御製が新聞に洩れ始めたのは明治三十七八年の戦役の頃ではなかつたらうか。少くとも此の頃から

高崎男爵
名は正風。歌人。
明治四十五年(三五
七)薨、年七十。

故徳大寺侍從長
名は實則。

新聞にあらはれることが、俄に多くなつたやうに思ふ。こ
れは、當時の御歌所長高崎男爵が洩らされたやうに承つて
居る。

元來、天皇には御製の世に洩れるのを御好み遊ばされな
かつた由であるが、それについては、一つの挿話を語らねば
ならぬ。私はそれを故徳大寺侍從長から承つた。或時の
こと、天皇は御製の類々として新聞に出るのを苦々しく思
召され、高崎男爵を御召しになつて、御注意があつた。然る
に男は金聲で、御言葉がよくも聞えない。その上、面をあけ
ず、御前に俯伏したまゝ承るのであるから、御氣色の程も相
分らず、今お咎めを蒙つてゐるといふことは一向氣が付か

ない。そこで、御製を世にお洩らし申し上げるといふこと
は、世道人心の上に誠に結構なものと存じて、畏れながら正
風取計つたこととござります。もしこれについて御咎め

詠寄目祝

歌

御宸筆
詠寄目祝の歌
あらたまのとしを
むかへてよろつた
みひとつこゝろに
くにいはふらし

あらうまれこゝろ
うてよろつたみい
ちなるるなくにい老
布良志

明治天皇御宸筆

を蒙るやうな事があれば、正風、切腹
して御申譯を致します。」と申し上げ、
おまけに手で腹を切るまねをして
御覽に入れた。徳大寺公は側で見
て居られて、をかしくて堪らなかつ
たが、笑ふにも笑はれず、ほと／＼困
り果てられたさうである。定めし、天皇にもをかしく思召
されたであらうが、重ねて其の事については御咎は無くて、

其のまゝに遊ばされたといふことである。高崎男爵が御叱りを覺悟して此の舉に出でられたのは、御製を陛下の赤子に知らしめて、大御心の程を玉の御聲のまゝに傳へることが、世道人心の上に裨益少なからずと確信されたからで、實に見上げた決心であつたと思ふ。果せるかな、戰時中、數のありがたい御製を拜して、國民の大和魂、即ち旺盛なる獻身奉公の心が、どのくらゐ燃立つたかは、思ひ半ばに過ぐるものがある。

そののみならず、當時東京帝國大學講師として築地に居つた英人アーサー・ロイド氏は、新聞で御製を拜見して、感激措く能はず、高崎男爵に乞うて他の御製をも頂戴し、謹んで

築地
東京市京橋區にある町名。

これを英譯して、各國の元首に贈呈した。其の時、男爵から屢、御製の寫を渡されてロイド氏の許に持參し、且その意味を英語に譯して聞かせたのは、私の門人彌富君であつた。殊にロイド氏が各國元首に贈つた英譯御製の中に、彼の

彌富君
彌富破摩雄。弘前高等學校教授。

よもの海みなはらからと思ふ世に

などなみかぜのたちさわぐらむ

といふのがあつたが、時の米國大統領ルーズヴェルト氏は、この御製を拜誦して、いたく感動し、天皇が如何に平和を熱望し給ひ、博愛仁慈の御心に富ませ給ふかに感激した極、自ら奮ひ立つて、日露兩國の調停に當らん事を決心するに至つたと言ひ傳へられてゐる。「筆は劍よりも強し」といふが、

これは、僅かに三十一文字の歌が幾百萬の將卒にもまさる力のあることを如實に物語るものではあるまいか。蓋し我が歌道あつて以來三千年未だ曾てあらざる盛事と申すべきであらう。

歌聖としての明治天皇、これを仰げば彌、高く、益、尊く、玉の御聲の畏さは、千古に傳へて朽ちざる聖訓である。

(明治大帝)

三〇 我等の陸海軍

平田晋策

平田晋策
兵庫縣の人。軍事
評論家。昭和十一
年歿。

我が日本の陸海軍は、かゝやく天皇陛下の軍隊である。天皇陛下は陸海軍の大元帥であらせられる。さうして

軍隊は天皇陛下の御命令でだけ動くのである。



軍旗を先頭に
（おのれ陸海軍のよるに）

天皇陛下の御命令がなければ、日本の軍隊は一發の彈丸も射たない。その代り、天皇陛下の御命令があれば、どんな強い敵に向つても、命を投げ出して戦つてゆく。

日本の軍隊は何者をも恐れない、どんな事にも動じない。たゞ天皇陛下の御命令だけを畏んで重んずるのである。

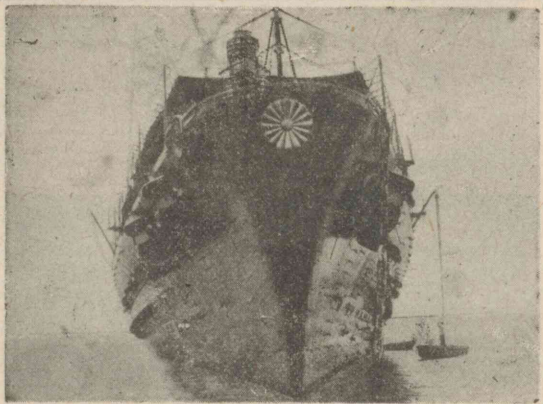
天皇陛下は、畏れ多くも、太陽のやうに公平無私であらせ

られる。天皇陛下の御命令は、みな正義の御命令である。その正しい強い御命令で動く日本の軍隊が、世界で一番正しく一番強いのに何の不思議があらうか。

世界に軍隊は多い。併し天皇陛下に率えられる軍隊は日本の外にはない。日本の軍隊は、尊い神聖な軍旗を、軍艦旗を、天皇陛下の御姿と仰ぎ、これを中心に、全員鐵の如く一致團結して、必勝の信念に燃え立つのである。

軍旗を見れば、思はず心が引き緊る。戦場で若い少尉がしつかりと旗竿を握りしめて、陛下から戴いた神聖な軍旗を翻す時、皆の心は電氣に掛つたやうに感激するのである。そして戦に傷いた兵士も、銃を杖にして立ち上つてゆく。

林聯隊長
陸軍少将林大八。
當時歩兵大佐、金
澤歩兵第七聯隊
長。昭和七年二月
二十日江灣鎮に於
て戦死。
古賀聯隊長
羅南騎兵第二十七
聯隊長騎兵大佐
(當時中佐)古賀傳
太郎。昭和七年一
月七日錦西に於て
戦死。



艦首の御紋章
(るよに軍海陸の等れわ)

太平洋の波に守を堅める海軍の軍人も、艦尾に翻る軍艦

「軍旗の下で死なう。」これが日本軍人の理想である。昭和七年の上海事變で戦死した林聯隊長も、最後の息の下から「軍旗を拜ませてください。」と言つて死んだ。遼西で奮戦した古賀聯隊長も、最後まで軍旗をお守りしなければならぬと勇ましく戦つた。蒙古の野原にひらめく軍旗、長江の水にうつる軍旗。皇軍の戦ふところには、必ず神々しい軍旗が翻つてゐる。

旗を見る時、しみじみと「自分達は天皇陛下の艦隊員だ、天皇

陛下の海軍軍人だ」と感ずるので

ある。どんな荒い波にも、どんな物凄

い暴風雨にも、そしてどんなに強

い敵にも、艦首に輝く菊の御紋章

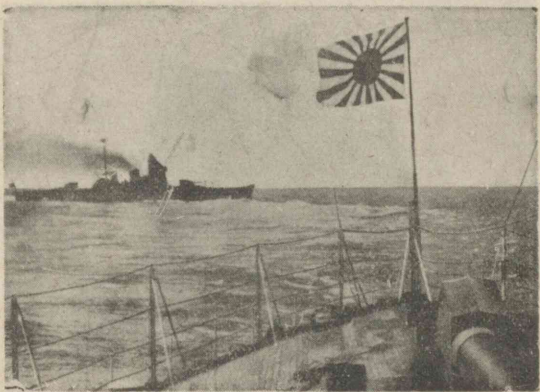
と、艦尾に翻る軍艦旗のお守りが

あれば、きつと勝つて見せる

ぞと、心に誓ふのである。

げに軍艦旗こそは、日本軍隊の生命である。

この御旗の下にこそ全員一心、死を決して戦ふのである。



軍艦旗
(るよに軍海陸の等れわ)

日本の軍隊は、天皇陛下の軍隊だから、兵隊同志たいへん仲がよい。將校だつて、外國の將校のやうに威張らない。

日本の將校が兵士を可愛がることは、ほんたうに涙が出る

ほどである。上海の戦場で、或將校は、敵の壕のすぐ眼の

前に死んでゐる部下の死骸を見て、どうしても放つておく

ことが出来ず、雨のやうに降る敵弾の中を這つて、泥にまみ

れながら、自分の身の危険を忘れて、その死骸を取りに行つ

た。そして、とうとう我が陣地に可愛い部下のからだを持

つて歸つた。

その將校は愛する部下の名譽の屍が、敵のために汚され

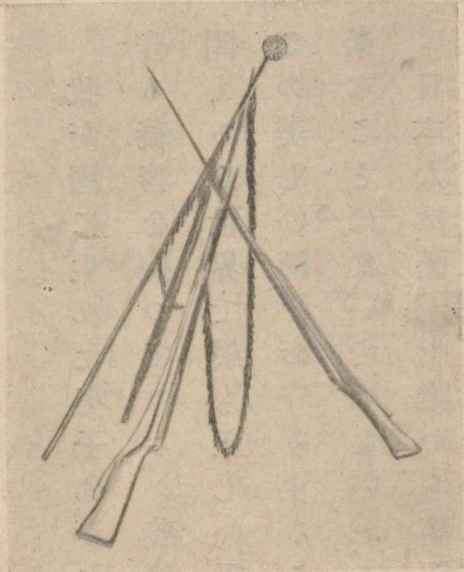
るのを見るに忍びず、自分の生命を忘れて陣地から這ひ出したのである。

この美しい人情こそ日本將校の偉いところである。戦に強いばかりが軍人ではない。昔から日本には「武士の情」といふ言葉があるが、天皇陛下の軍隊は、また情ある軍隊である。

陸軍ばかりではない、海軍でも士官が水兵を可愛がることは、外國の海軍士官たちを驚かしてゐる。外國の海軍では、潜水艦が沈むと、きつと水兵たちが我勝ちに逃げ出さうとして騒ぐため、士官がピストルで射ち殺したりするといふことだ。それに比べて、我が第六號潜水艇や、第四十三號

第六號潜水艇
明治四十三年四月十五日山口縣岩國新港沖に於て沈没。艦長佐久間勉大尉外十一名殉難。
第四十三號潜水艇
大正十三年三月十九日佐世保港外に於て沈没。艦長心得乘島新大尉外四十四名殉難。

潜水艦の沈んだ時には、士官と水兵が死ぬる時まで助け合つて、日本武士の情を全世界に知らしめたのである。



(旗軍隊聯一第兵歩衛近) 旗軍の古最本日

これが日本の軍隊だ。將校と兵士が仲がよいばかりでなく、將校と將校、兵士と兵士の間の仲のよいことも、日本軍隊が世界の一番だらう。あの戦友の歌にもあるやうに一本の煙草を二人で分けて喫み合ふのが、日本の兵隊さんだ。江下・作江・北川三工兵のやうに、一つの爆薬筒を戦友同志

江下・作江・北川
工兵伍長江下武二
作江伊之助・北川
丞。所謂爆薬三勇士。

がしつかり抱き合つて、敵陣へ飛びこんだりするのは、ほんたうの友情で結ばれた日本の兵隊だからである。

我が國に生れた男子は、みな天皇陛下の軍人として國を守る義務を持つてゐる。義務といふと何だか辛いやうに聞えるが、世界で最も正しい軍隊、一番立派な軍隊に入つて、この美しい國をお守りすることは、男子として、これほど光榮なことはないではないか。

日本人は満十七歳から満四十歳に至るまで、みな軍人である。軍人になれない者は、ひどい不具者か、病人か、悪い事をして長い間刑務所に入つた人だけである。

しかし、毎年五十萬もの人が、みな兵營に入つてゆけば大變だ。だから國民の中で、一番からだの良、しつかりした人たちを、一年に十萬人餘り選んで、陸軍と海軍へ入れるのである。そしてその人たちだけが、カーキ色の軍服を着、紺色の水兵服を着て、楽しい兵營生活に入るのだ。

だが、後の四十萬人の人も、兵營には入らなくても、補充兵、國民兵として、みな軍人だ。いざ戦争となれば、誰も彼も鐵兜をかぶり、防毒面をつけ、しつかりと銃を握つて、戦はなければならぬ。

日本のやうな立派な軍隊ではないが、外國でも、フランスやロシアでは國民皆兵である。ましてこの日本で、みんな

が兵隊になるといふことは何の不思議でもない。
諸君もやがて陸軍か海軍へ入つて、男らしい軍隊生活を
送られるだらう。その時には、どうか「自分は天皇陛下の軍
人である。自分は天皇陛下の御命令によつて軍隊に入つ
たのだ」といふことを、しつかりと考へて、強く立派な正しい
兵隊になつて下さい。(われ等の陸海軍)

三一 善言三題

三浦梅園

三浦梅園
名は善、豊後の人。
安政元年(一八四九)歿、
六十七。

一 毀譽は大節なり。
毀譽は人の大節なり。然りといへども、世舉りて譽むる
にも必ず察すべし、人舉りて毀るにも必ず察すべし。況や

一人は譽め一人は毀るに於てをや。たとへば訴へ事あら
んに、兩方理なりと思へばこそ、互に言ひ募りて止まざるな
れ。之を奉行のさばかんに、兎に角一人は勝ち一人は負け



三浦梅園

め、負けたる人は毀るなり。又
悪しき人なりとも、それに伴ふ
人は之を善しと思へばこそ交
はるなれ。我が善しと思ふを
ば譽め、我が悪しと思ふをば毀る習なれば其の毀譽により
て其の人の善悪も分ち難し。
昔人ありて、其の子をある寺へ遣はし置きけるに、暫くあ

りて逃げかへり、住持五僧のことを毀りけるは、我に『月代剃れ。』と言ひければ、例の如く剃りけるを、剃りやうの分きて悪しとていづく叱つたいたく叱りぬ。又ある時、我が廁便所に行けるを見て、『何とて廁へは行きし、不届なり。』向後廁へ行くべからず。』と言ひ、其の後朝飯炊くとて味噌味噌を摺りけるに、之も味噌を摺るが聞えぬとて、理不盡の次第、殆ど困却に及ぶ。』と語りけるを、親聞きて、『さりととは出家にも似合はざることなり。』とて、急ぎ山に登り、右の事ども詰りけるに、住持聞きて、『いや、さやうのことにては無し。常々髪よく剃る故、此の頃剃らせけるに、いたく眠りて、これ見給へ、此の如く頭へ切込み候。』とて、疵を見せ、其の上、廁も常の廁へは行かて、客の爲に設けたる方へ

行き、味噌も常の味噌をさしおき、客に使ふべきを使ふ。是等の指南をこそ返すべし、も致しつれ。』と言ひけるにぞ、親もその理に服しけるとぞ。

二 断えざる努力

今の人の、或は學に志し、或は藝に志すもの、一旦憤たんぱんを起し、晝夜を分たず勉め勵むといへども、已に一月を経、半月を過ぎ、怠る心はやく生じ、わがつとめ至らざることはいはで、性質の過に委す。馬ははやしとても、朝暫く走りてやまんに、いかで牛のひねもすありかんに及ぶべき。谷間の石の磨七まねかれ、井桁井桁のまろくなるも、豈一朝一夕の力ならんや。今日やまず、明日やまず、今年やまず、明年やまず、然して後そのし

るしあり。人一生の力をその道に用ふるさへ、なほその奥義に到るに易からず。況や、わが半月一月、乃至半年一年のつとめをもつて、他人一生の功に比せんとするをや。思はざるの甚だしきなり。

昔、李白書を匡山に讀む。漸く倦みて他行せし時、道にて老人の石にあてて斧をするにあふ。これを問へば、針となさんとてするなり。といへるに感じて、その後、つとめて書を讀み、終にその名を成せり。小野道風は、本朝名譽の能書なり。若かりし時、手を學べども進まざること、をいとひ、後園にさまよひけるに、蛙の泉水のほとりに枝垂れたる柳の枝にとび上らんとしけれども、とゞかざりけるが、次第々々に

李白

支那唐時代の詩人。

匡山

支那四川省油縣にある。

小野道風

能書家。康保三年(六六六)年七十一。

高くとびて、後遂に柳の枝にうつりけるを見て、藝は努むるにある事を知り、それより學んでやまず、遂に能書の名を得て、その名今に高くなりぬ。

三 理窟と道理

理窟と道理とへだてあり。理窟はよきものにあらず。たとへば、親羊をぬすみたるは親の悪しきなり。親にてもあれ、悪しきなれば、直ちに訴ふべし。といふは理窟なり。「親羊をぬすみしは悪しきことながら、親悪事あればとて、子これをいふべきやうなし。」とてかくしたるは道理なり。「人死してはふたゝびかへらず。歸るべき道あらば、歎きても歎くべし。かへらぬ道なれば、歎くも益なし。」といへる

は理窟なり。「人死しては再びかへらず。歸るべき道あら
 は歎かずともあるべけれど、かへらぬ道こそ悲しけれ。」など
 歎くは道理なり。(梅園叢書)

國語讀本卷三終

昭和十二年八月十九日印
 昭和十二年八月廿三日發
 昭和十三年二月十七日訂正再版印刷
 昭和十三年二月廿一日訂正再版發行

不許複製

國語讀本 改訂新版

(各卷 定價金六十錢)

編者 上田萬年

同 榮田猛猪

同 鹽野新次郎

發行者 東京市麴町區丸ノ内三丁目六番地
 株式會社 啓成社

印刷所 右代表者 布津純一
 東京市牛込區早稻田鶴卷町一〇七
 株式會社 康文社印刷所

東京市麴町區丸ノ内三丁目六番地

發行所 株式會社 啓成社

電話丸ノ内(23)二六八六番
 振替東京一二〇五五番

森園製

